2017.4 no.76

aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

井上勝江 「もののあわれ」（桜） 木板画 150 × 150cm

表紙写真

「もののあわれ」（桜）

木版画　150 × 150cm

桜は日本を代表する花とされています。40 年位前に宇野千代女史が淡墨桜の保存を　唱えておられました。私はある雑誌を読んですぐ淡墨桜に逢いたくなり訪ねました。根尾谷に千二百年余りの姿で花を咲かせた老樹は力強く地に食いついていました。

大勢の方々の手で支えられている姿は今も心に焼き付き、自然界の不思議さ美しさ、そして流れゆく姿に感嘆するものです。今千五百年余りの命を支えている老樹山桜の源はなんなのでしょうか。過ぎ去りし昔、梶井基次郎の短編「桜の樹の下には」を読んだ事を思い出しました。「あんなに見事な花を咲かせるなんて信じられない、きっと桜の樹の下に屍体が埋まっている。」との一節を思い出したのです。

また逢いたくなりました淡墨桜に。

井上勝江「春を待つ」（椿）木版画４枚続き（右半分）　150 × 300cm

井上勝江

新潟県生まれ

1976　日本板画院同人、aaia賞（建築美術工業協会）、日本玩具シリーズ（米田工房刊）

1982　日本板画院理事（1982-99）

2007　第 57 回板画院 棟方志功賞

2015　府中美術館　版画がつなぐ心とココロ 棟方末華 井上勝江展

現在 日本板画院同人、同院評議員、日本美術家連盟会員

よみうり文化センター町田講師、日本建築美術工芸協会会員

2017.4 no.76

CONTENTS

■ 平成28年度　ＡＡＣＡ賞・芦原義信賞

平成28年度　設立記念会・協会賞表彰式　挨拶・祝辞　3

平成28年度　AACA賞・芦原義信賞（新人賞）　審査総評　古谷　誠章　4

［AACA賞］G.Itoya ファサードからガレリア（みち）へ　中藤　泰昭　8

［芦原義信賞（新人賞）］「建築的介入」の思考　平瀬　有人　平瀬　祐子　9

［AACA賞 優秀賞］にほんのあらたなてしごと　橋口新一郎　10

［AACA賞 奨励賞］実相寺　毘沙門堂　山田　誠一　11

［AACA賞 奨励賞］島のローカリティーを映し出す　石井　大五　12

■ 時代の華一輪

何故こんなにも心惹かれるのか　置鮎早智枝　13

まだまだ…未々…そしてこれから　吉野ヨシ子　14

ー 土に魅せられて ー　小野寺恵美　15

■「第3回街に飛び出す作品展」

芸術性豊な環境と景観の創造　馬屋　正　16

■ aacaトーク「エコロジーとアート」

自然と愚直に格闘する　岩城　和哉　20

エネルギーに対してのアプローチ　大野　公士　21

■ フォーラム委員会だより

第188回 aacaフォーラム

精緻な美の世界ー江戸小紋　小宮康正（江戸小紋染め職人）　中野恵美子　22

■ 調査研究委員会だより

一日研修ツアー（北関東巡り）　小野　行雄　23

■ 会員交流委員会だより

第11回 aaca愛知・飛騨高山・岐阜地区 建物視察会　松隈　章　24

「天空からタイルの女神が…」　松本　治子　25

アピアランス　26

広報委員会だより・事務局だより・他　28

平成28年度 AACA賞・芦原義信賞（新人賞）

〈審査総評〉

選考委員長　古谷誠章（建築家）

ＡＡＣＡ賞のユニークさについてはかねてより敬意を抱いておりましたが、本年の実に多様な幅広い応募作品を見るにつけ、通常の建築賞、芸術賞にはない、建築と美術と工芸の結びつきやその存在理由を問う、この賞の独特のアイデンティティを再認識しました。建築だけでもなく、アートだけでもなく、その双方の相乗性がまさに重要なテーマになっていると思います。

そんな中で、今年のAACA賞に輝いたのが「G.Itoya（銀座・伊東屋）」で、なじみ深い銀座中央通りに建ち、他が商業的な装いで妍を競う中で、凜とした建築それ自体が洗練された「彫刻」とも言えるような佇まいは、建築とアートが単純に足し合わされたものには生み出すことのできない、統合された力強さと美しさを感じます。まさにこの賞にふさわしいものでした。

芦原義信賞および優秀3作品も、いずれ劣らぬ個性派ですが、なかでも芦原義信賞を獲得した「富久千代酒造 酒蔵改修ギャラリー」は、築90年以上の酒造会社の旧精米所を現代的に再生するもので、大変意欲的な挑戦作であると同時に、無垢の黒皮鉄板を用いた質感が古い建物に蓄積する年月と響き合って、見事な新旧の和音を奏でています。新人とは思われぬ力量で文句なく優秀賞の水準に達しており、見事な作品でした。

優秀賞の「織物の茶室～下鴨神社・糺の森～」は繰り出された絹の糸を張った庵が、移ろう陽の光の中で忽然と現れ、忽然と姿を消す儚さとあいまって、現代的な日本の美を体現しています。分けても実際にその中に人が入り一幅の茶をたしなむ光景は、建築とアート、さらに人の織りなす鮮やかな造形となっており、木漏れ日や吹き渡る風や鳥の音などを纏ってさらに一段と映えています。

同じ優秀賞「ヤマノイエ」も含めてこれまでの3作はいずれも若い世代の作家によるものですが、とくにこの作品には新人離れした成熟した密度がありました。敷地環境に恵まれているとはいえ、これだけの変化に富んだ空間を斜面に破綻なく配置し、その各所に居心地の良さをもたらした手腕は稀有のものです。優秀賞残り1作は「MIZKAN MUSEUM」下見板張りと三州瓦の屋根並みの中に、しっくりと溶け込んだ外観には、見る者を納得させる存在感と街並みに調和する優しさが感じられます。そこには単に既存に埋没させるのではなく、周囲と拮抗して新しい調和を生む力強いフィロソフィーが感じられます。特別賞「北菓楼札幌本館」と「東京ガーデンテラス紀尾井町パブリックアート計画」は、それぞれに異なる特異なアプローチがなされていますが、奇しくも既存建築をリスペクトして保存する計画を含んでいる点が共通しています。対照的なのは片や内部に新たな造形を挿入、片や外部に変化に富んだランドスケープをデザインしたところですが、いずれも新旧の要素が相乗的に働いてまったく新しい人々のアクティビティを生んでいます。

結びに、これだけのバラエティに富んだ入賞作品を顕彰できたことを大変うれしく思います。来年も大いに期待しています。

■ 第26回 AACA賞 受賞作品

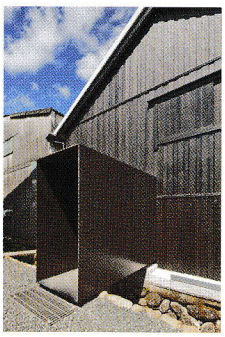
AACA賞
「G. Itoya（銀座・伊東屋）」

作　者：中藤泰昭・面髙宏樹
（大成建設㈱一級建築士事務所）
所在地：東京都中央区銀座 2-7-15

（撮影　㈱新建築社）

芦原義信賞
「富久千代酒造 酒蔵改修ギャラリー」

作　者：平瀬有人（佐賀大学大学院工学系研究科准教授）
平瀬祐子（yHa architects）
所在地：佐賀県鹿島市浜町 1244-1



（撮影　Techni Staff）

平成28年度　設立記念会・協会賞表彰式

●開催日　平成28年12月14日（水曜日）午後5時45分～
●場　所　建築会館大ホール（東京都港区芝5-26-20）
●来　賓　日本建築家協会会長　六鹿正治様
　　芦原初子様
　　旭硝子㈱　日本事業部主席　武内真弓様
●出席者　来　賓・報道関係　　9名
　　会　員・一　　般　69名
　　受賞者・応 募 者　33名　合計111名
●次　第　会長挨拶　会長　岡本　賢
　　来賓挨拶　日本建築家協会会長　六鹿正治様
　　選考結果発表　選考委員長　古谷誠章

岡本　賢会長　挨拶

28年前の12月に芦原義信先生がこの日本建築美術工芸協会を創立され、それを記念して毎年この会を催しております。本日は記念会でありますが当協会の主要な事業であります AACA賞・芦原義信賞の表彰式を兼ねておりますので、大勢の受賞者の方々にもご出席いただきました。また日本建築家協会会長の六鹿正治氏のご臨席を賜り誠に有難うございます。

26回になります AACA賞は、今年も数多くの応募を頂きまして応募された皆様には厚く御礼致します。

年々レベルの高い作品が多くそろってまいりまして、審査に当たりました選考委員の方々の大変な激論により賞が選ばれた訳でございます。その内容につきましては、選考委員長の古谷先生より詳しくお話し頂けると思いますが、そちらのパネルで受賞されたそれぞれの作品をご覧いただけると思います。

当協会は会員の方々が自主的に活動して頂ける場を提供する、ということで様々な事業を展開しております。このAACA賞・芦原義信賞はその主だったものの一つでございます。　そのほかに景観シンポジウム、講演会、フォーラム、展覧会等様々な事業を展開しております。最近では街の中を展覧会の会場にしようとする企画もやっておりまして、街の中が美術館「街なかミュゼ」と名づけ、新しいプロジェクトの実施に伴いアート作品を色々取り込んでおります。当協会は空間総合芸術をメインにして取り組んでいる協会でありますので、現在会員のスターツ様の協力を得ながら展開して、街の中にいろいろなアート作品を置いていく企画であります。

当協会の特徴であります総合空間芸術の視点から、AACA賞の各賞も単に建築だけでなく芸術・アートが一体となった新しい空間を作っていく視点で選考されております。どうぞ本日受賞されました皆様方、関係をされた皆様方もぜひこの協会の企画に参加して頂いて、新しい方たちと会員とが交わって新しい発見をしていただきたいと思います。この総合空間芸術に関わるいろいろな方々が所属しておりますので、いわゆる異業種交流のような形で新しい発見・交流ができるのではないかと、そういう機会にしていただければと願っております。受賞者の皆様方、本日の受賞　誠におめでとうございます。芦原先生は多くの方々と飲んだり食べたりするコミュニケーションを大切にしておられました。受賞された皆様もこの後の交流会の最後まで楽しいひと時を過ごして頂きたいと思います。

受賞された皆様　誠におめでとうございます。

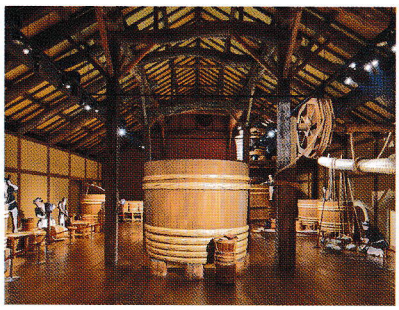
日本建築家協会会長 六鹿正治様　ご祝辞

この団体は芦原義信さんを中心とした方々が今から28年前に作られ、ユニークで意義あることと理解しております。その芦原義信さんのご長男の芦原太郎さんから引き継いで日本建築家協会の会長をやらして頂いておりますけれど、この10月に全国大会があり、その際に本日の審査委員長の古谷先生にもおいでいただきました。色々なことがデスカッショされたのですが、テーマは笑都物語　副題に「繋いできたもの、繋いでゆくもの」でした。これはなかなかのタイトルでして、私も大会の挨拶で申し上げたのですが、今色々な地域で競争が行われ、それぞれの地域で特色があって役割分担もある中で競争によるレベルアップもあり又落ちこぼれてゆく部分もあるわけで、むしろ同時に役割分担することがすごく大事であって、連携することを一生懸命に考えないと全体が生産的に盛り上がっていかないと考えています。つまり地域間の連携、空間を繋いでいくことが大事で、あわせて過去の歴史と今の町をしっかりと繋いで、過去のものをしっかりと保存し修復し、今の形に合わせて今の生活の中にうまく踏みこんでいく、つまり時間を繋いで行く、空間を繋ぎ時間を繋ぐことがとても大事だなということをそこでも皆さんと共に認識しながら議論したわけであります。最終日、古谷さんと何人の方々が議論された中で、一つ僕の耳に残った、心に残った言葉があります。色々な大会ですごく生産的な議論が行われるけども、大会が終わると忘れてしまう、また一年たつと同じようなことを議論している、まさにどの大会でもどの団体でもそういうことがあるのですが、幸い建築家協会の来年の大会は四国徳島で行われ、そのテーマは「連の国」つまり繋がるのですよ、地域的にも連なっていく。要するに今年のテーマだった「繋いできたもの　繋いでゆくもの」を次に繋いでいくテーマなのです。よかったなと思いました。私たちの日々の活動のなかで「切る」ことも大事ですが、あわせて常に何かを繋いでより生産的なものを作っていくことも大事かなという気がしています。この日本建築美術工芸協会は設立当初から繋ぐという事が大事な目標となっていることをつくづく感じています。すなわち建築と美術・工芸、会長は異業種交流とおっしゃいましたが、隣接している比較的近い分野でありますけれど、そこの人たちがお互いの活動をいろいろな形で繋いでいく、その中でそれぞれが高めあって上にあがるということだと思います。そういうことで来年一年もまた繋いでいくということを熱心に考えていきたいなと考えています。本日の平成28年設立記念会　誠におめでとうございます。

AACA 賞・優秀賞

「MIZKAN MUSEUM」

作　者：小川大志・髙橋 勉（㈱ NTT ファシリティーズ）
所在地：愛知県半田市中村町 2-6



（撮影　㈱エスエス　名古屋支店）

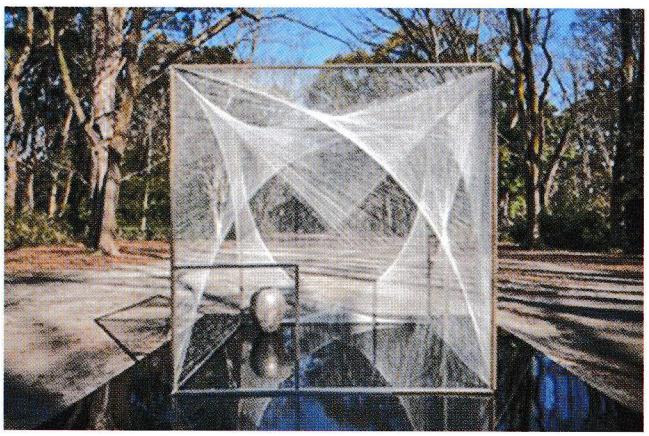
「ヤマノイエ」

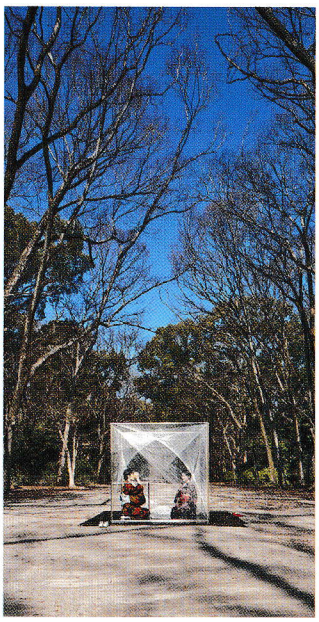
作　者：建築：津野恵美子（津野建築設計室）
　　外構：田賀陽介（田賀意匠事務所）
照　明：内藤真理子（コモレビデザイン）
テキスタイル：安東陽子（安東陽子デザイン）
所在地：非公開

（撮影　西川公朗）

「織物の茶室　～下鴨神社・糺の森～」

作　者：橋口新一郎（（株）橋口建築研究所）
所在地：京都府京都市左京区下鴨泉川町 59





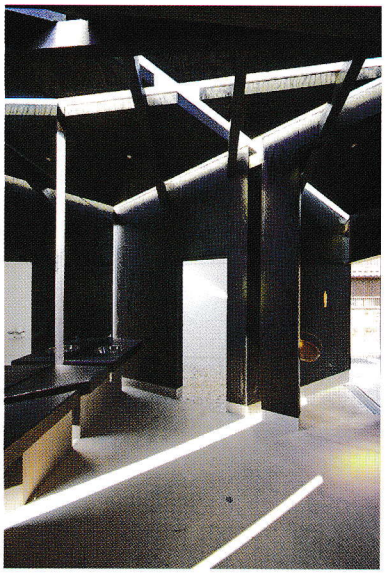
（撮影　淺川　敏）

AACA 賞・奨励賞

「実相寺 毘沙門堂」

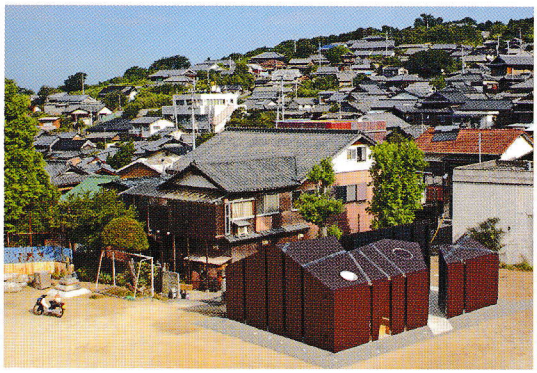
作　者：山田誠一（山田誠一建築設計事務所）
所在地：静岡県静岡市清水区清水町 12-19

（撮影　山内紀人）



「トイレの家」

作　者：石井大五
（+フューチャースケープ建築設計事務所）
所在地：香川県観音寺市伊吹町 309



（撮影　石井大五）

「TSURUMI　こどもホスピス」

作　者：片瀬順一・出口 亮
（大成建設㈱一級建築士事務所）
所在地：大阪府大阪市鶴見区浜 1-1-77

（撮影　㈱新建築社）

AACA 賞・特別賞

「北菓楼札幌本館」

作　者：建築設計：㈱竹中工務店
店舗基本デザイン：安藤忠雄建築研究所
所在地：北海道札幌市中央区北１条西５丁目

（撮影　高崎建築写真工房　並木博夫）

「東京ガーデンテラス紀尾井町　パブリックアート計画」

作　者：事業主・アート企画：㈱西武プロパティーズ
設計・監理：㈱日建設計
外装デザイン：Kohn Pedersen Fox Associates P.C
ランドスケープデザイン：PLACEMEDEA Co.Ltd
アートディレクション：㈱織絵
アートコンサルティング：森美術館
所在地：千代田区紀尾井町 1-2

（撮影　Franco Tadeo Inada）

平成 29 年度
AACA賞 募集案内

- 募集期間　平成29年7月3日（月）～9月8日（金）
- 選考期間　平成29年9月11日（月）～11月22日（水）
- 受賞作品発表・表彰式
  平成29年12月13日（水）・29年度協会設立記念会にて

日本建築美術工芸協会は建築家芦原義信氏らが設立した、建築家・美術家・工芸家・デザイナー達が連携協力し、芸術性豊かな環境と景観の創造を目的として、我が国の文化向上に寄与する事を願い設立された団体です。ＡＡＣＡ賞は当協会の設立理念と目的に叶い、建築、美術、工芸、ランドスケープなど様々な分野が協力し、融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を対象とする協会賞です。芦原義信賞は協会賞応募者の中から新人で、優れた文化的環境や芸術的景観を実現させた未来ある、個人、グループ、団体を選び表彰する新人賞で、新人に年齢制限はありません。

● AACA賞

G.Itoya　ファサードからガレリア（みち）へ

大成建設株式会社一級建築士事務所　設計室長
中藤 泰昭

東京銀座中央通り。商業の一等地であるこの通りでは、我目立とうとする建築が集合して、ファサードの博覧会が繰り広げられている。旧銀座伊東屋ビルもわずか８ｍの間口ではあるが、そこに軒を連ねていた。1965 年に建てられたそのビルは、当時の最新の素材を使ったファサードから、「ステンレスビル」として親しまれていた。

このビルを建替えるにあたり、まずファサードをなくしてしまおうと思った。旧銀座伊東屋ビルのステンレスのファサードを、敷地の中に折り込んで、ビルの内側を通じて背面の通りに貫通させた（写真１）。ビルの内部に伊東屋の世界を建ちあげ、まちに開かれたインターフェイスとして再構築している。そうすることで、8m という狭い間口が新しい価値に転じ、表も裏もなく、誰もが入りたくなる心地良い「ガレリア（みち）」が積み重なる建物になると考えた。

「心地よいときを過ごす喜びを感じる空間」「新しい価値を絶えず提案する店舗」をコンセプトに、フロア毎に世界感をもつ店舗に加え、ビジネスラウンジ、レストラン、またそこで提供する食材を生産する野菜工場や、多目的な利用が可能なインスピレーションホールも設けて、従来の文房具を売るだけの店舗から、目的を持たない通行人を引き込み、予期せぬ特別な体験・発見が出来る場としている。

「ガレリア（みち）」を実現するために、565㎜厚の外壁の中に、設備配管と空調、そして構造体を内包して、幅員を最大限確保している。また、高さ 200mm の小さな梁やダクトを使わない換気計画等、徹底して「ガレリア（みち）」の気積と開口部が最大となるようデザインし、外部との連続性が高いおおらかでゆったりとした内部を目指した。

鮮やかで高密度なビルが林立する銀座の街に、「ガレリア（みち）」が入り込み、人々が特別な時間を過ごせる場所となることを望んでいる。

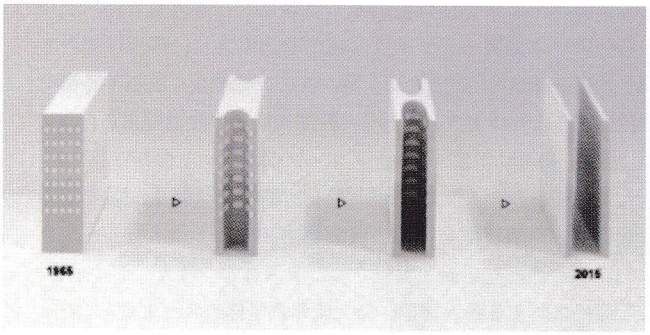


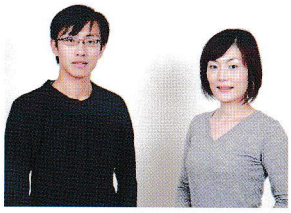
写真１　コンセプトモデル

写真２（撮影：新建築社）

● 芦原義信賞（新人賞）

「建築的介入」の思考

佐賀大学大学院
工学系研究科准教授 平瀬 有人
yHa architects
yHa architects 平瀬 祐子



このたび芦原義信賞（新人賞）をいただいた《富久千代酒造 酒蔵改修ギャラリー》は築94年の旧精米所をギャラリーに再生したプロジェクトです。

酒造の立地する佐賀県鹿島市は東部が有明海に面し、南西部が長崎県と県境をなす人口約3万人の街です。鹿島市の肥前浜宿は有明海に注ぐ河口につくられた古い町並みが残る在郷町で、港町・宿場町として栄え、豊かな水と米があることで江戸時代から酒づくりが行われてきました。その中で、大正末期創業の富久千代酒造は1,000石の酒蔵ですが、さまざまな鑑評会で賞を獲得するなど高い評価を受けてきました。2011年に銘柄「鍋島」がIWCインターナショナル・ワイン・チャレンジ日本酒部門で世界一の最優秀賞を受賞したことで一気に多くの注目を集め、酒蔵には各地から観光客が多く訪れるようになっています。蔵開きを中心とした「鹿島酒蔵ツーリズム」が始まり、2016年には2日間で7.5万人の集客を得たようです。

IWCインターナショナル・ワイン・チャレンジ受賞を契機に、私たちはショールーム・オフィス・ラウンジ・米倉庫などの改修計画に継続的に携わっており、本計画は登録有形文化財の旧精米所（1921年竣工）を来訪者の試飲や酒造り展示のできるギャラリーに改修したものとなります。登録有形文化財であるため、基本的に外観や形状の変更はできず、外壁を焼杉によって修景しています。旧精米所の建物は長らく倉庫となっており、隣の設備棟に構造的にもたれかかって傾いている状態でした。計画では、屋根の軽量化と共に曳き起こしにより傾きを修正し、梁の下に新たに鉄板を挿入することで構造補強をしています。12mm厚の黒皮鉄板の壁は、正方形の孔の周りに4.5mm厚のリブ枠材を取り付けることで耐力を上げると同時に一升瓶や四合瓶を展示する什器となっており、構造がそのまま仕上げになる鉄板壁は、磁石を利用した什器として使うことで将来の展示計画への対応も考えています。

計画にあたり、一般的な古民家改修に見られるような柱梁の接合部を補強する方法ではなく、構造補強の鉄板を内側にオフセットして挿入することで、内壁の94年前の土壁はできる限りそのまま残そうと考えました。それは時間の堆積した土壁という重厚なマテリアルに対して、古色塗りでカモフラージュした木材のような構造補強のための表層的なマテリアルを衝突させることに違和感があったからです。そうしたマテリアルに内在する時差を承知しつつ、あえて鉄板を用いたのは、黒皮鉄板にも土壁の持つエイジングと同質の錆びゆく美学があると感じた所以です。

「窓は、イメージをフレームに収めることを表す建築的および比喩的なレトリックとして深い文化的歴史をもっている。・・・アルベルティからwindowsに至るまで、フレームのなかに見たものによって世界を知る」（『ヴァーチャル・ウィンドウ』2012年、産業図書）わけで、いかに世界をフレーミングするか、という点が建築の重要な側面であると考えています。鉄板壁に穿たれた正方形の孔は、いわばそうした94年前の得も言われぬ土壁をフレーミングし、観測するための装置（observation device）となるのです。ギャラリー内部の展示物を観ることはもちろんのこと、正方形の孔を通じてこの建築を観る、という複数の視点を同時に得ることもまたこの計画の重要なテーマのひとつでした。

全体の計画を通じて、古くから残る建築の祖形を際立たせつつ敢えて新しい要素を入れることで、所与の空間や古いものがさらによく見えるような「建築的介入」（Architectural Interventions）の思考を常に意識しています。

現在、引き続き酒蔵の環境改善に向けて改修計画に携わっております。地域の保全再生や文化的都市創造に寄与できるよう、精進していきたいと思います。このたびは受賞選定、誠にありがとうございました。

ギャラリー／既存柱が建つ中に、光天井と吹抜が混在する

© harigane yousuke

回廊とギャラリー／梁の下に新たに黒皮鉄板を挿入することで構造補強

© Techni Staff

● AACA賞　優秀賞

にほんのあらたなてしごと

株式会社橋口建築研究所 代表取締役
近畿大学建築学部 非常勤講師
日本建築美術工芸協会会員
橋口新一郎

国の内外に関わらず、美術館や歴史博物館に足を運ぶと、現代では再現することが困難な伝統技術を目にする機会が増えている。このことは、これまでに受け継がれてきた伝統的な技術や感性がとぎれつつある現実を指し示している。

私の実家は、奈良の田舎にある。田の字型プランに濡れ縁がついた、オーソドックスな日本家屋だ。畳敷きの部屋に座布団を敷いて食事をしたり、寝そべったり、大黒柱を中心に走り回ったり、夜は布団を敷いてお爺ちゃんの寝床を取り合ったり。幼少の頃より、畳・襖・障子・屏風といったものを遊び道具にしては、こっぴどく叱られもしたが、とにかく和の表具と触れ合う機会に恵まれていた。日々の生活から和の空間を体感し、その魅力を知らず知らずのうちに肌で体得してきたように思う。シックハウスでアトピーになることなんて無かったし、結露やカビに悩まされることもなかった。ほどよい隙間風や、深い軒先から乱反射してくるほのかな光、襖一枚隔てた隣の部屋の声、もれる灯り、呼吸する壁――。和の魅力が尽きることはない。

一方、日本人の和室離れが止まらない。2014年に発表した「和紙の茶室｜蔡庵」※1は、越前和紙の工房を訪ね歩き、作っても作っても倉庫に積み上げられる、手漉き和紙の危機的状況を、アンチテーゼ的に表現したものである。皺が一つつけば、商品としての価値を失う和紙をあえて破り、くしゃくしゃにし、楮の枝に突き刺して積層することで、革新的な和紙の表現に挑んだ。

和紙の茶室ができるまで、建築家は、常に幸せを与え続ける仕事だと思っていた。これまで、家やオフィスを建てる、店舗を出す、いずれもハレの機会に相談を受けることしかなかったからだ。医師は日々命と戦い、時には残念な告知をしなければならないこともある。自分にはできない職業のひとつだと思っていた。もちろんなれもしなかっただろうけれど。

2013年11月、越前から遠く尾道まで訪ねてくださった、和の表具等を販売する社長と和紙を生産するメーカーの社長からお声掛けをいただいた。聞けばとにかく業界を救って欲しいとのこと。すぐに越前へと向かった。そこには、瀕死になった伝統技術が静かに眠っていた。ただ、そのお二人と全ての職人さんは、とても熱く話してくれた。「救える。」そう思った。翌年10月、奈良の西大寺で行われる秋の大茶盛式※2に合わせ、和紙の茶室を発表する機会を得た。和紙の準備には、延べ200人以上の協力者と膨大な時間を共有した。茶会前日より22時間にもわたる組み立て作業の末に和紙の茶室は完成した。大きな歓声とともに、「これまでずっとこれがしたかったんだ。」と思った。茶会はもちろん大成功。「日本にはまだまだ多くの危機に瀕した伝統技術がある。それを絶やすわけにはいかない。」と気づかされたのである。

写真1　和紙の茶室｜蔡庵（奈良・西大寺にて）

京の地は、先人より代々伝えられ、研ぎ澄まされた伝統的な技術に満ち溢れている。この歴史あふれる地の力をお借りし、伝統的な技術や感性が、数多くの縁と堅く結ばれることを祈念し、下鴨神社・糺の森※3にて奉納茶会を催した。日本の伝統技術のひとつである襖（ふすま）には、和紙だけではなく、織物を和紙で裏打ちした高級なものがある。しかしながら、日本の伝統的な技術や感性から生まれる高級なものは、どんどん求められなくなってきている。

いったいなぜなのだろうか。

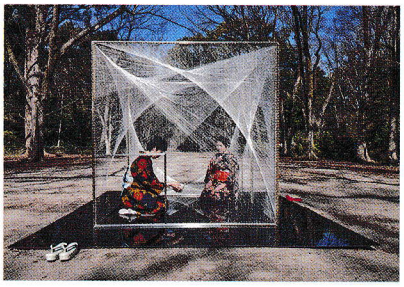


写真2　織物の茶室｜霞庵（下鴨神社・糺の森にて）

襖紙に使用されている織物のほとんどは、京都南部の工場で生産されている。工夫に工夫を重ねられたとても繊細な織機と、長年の経験によって研ぎ澄まされた感性を備えた手仕事が、正しく織り重なって襖紙が作られているのだ。その姿は、言葉では言い表せないほど魅力に富んでいる。しかしながら、ほとんどの人はこの製作過程を目にすることはない。この素晴らしい日本の伝統的な姿をより多くの人に知っていただくためにできたのが、「織物の茶室｜霞庵」※4である。

絹の縒り糸がまるで生きているかのように、繊細な機械をシュンシュンとすり抜ける姿を表現した茶室は、置かれた環境と呼応し合いながら、これからの伝統技術が目指すべき"新しい日常"を指し示している。

これらの茶室は、私が日本の伝統的な技術・美学・感性に触れ、特に何かを生み出したわけでもなく、感じたままのことを表現したものである。よって、誰しもが同じ場所に身を置いた時、時代を越えても共感できる感覚のひとつだと考えている。これらの活動が、「にほんのあらたなてしごと」に寄与することを切に願っている。

※1　蔡庵は、建築家で東京大学名誉教授（当時）の内藤廣先生が後漢の蔡倫に敬意を払い、名付けてくださいました。
※2　大茶盛式は、鎌倉時代の延応元年（1239年）から伝承されている茶会で、750年以上の歴史をもつ儀式です。
※3　世界遺産・下鴨神社は、正式には、賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ）とよび、紀元前より長い歴史と共に祀られてきました。流鏑馬（やぶさめ）神事、葵祭などが有名で、楼門の手前にある『相生社』は、縁結びの神様として多くの人々に親しまれています。
※4　霞庵は、建築家・出江寛による深く鋭い感性からいただいた銘です。

● AACA賞　奨励賞

実相寺　毘沙門堂

山田誠一建築設計事務所　代表
日本建築美術工芸協会会員
山田 誠一

昨今の形式的で簡便な葬儀の在り方をはじめ、私たちの身の回りに溢れる様々な欲を満たす為の情報の氾濫などが原因となって、日常と死との距離が、以前に比べ急速に乖離しつつあるように思う。

それは、通夜を執り行うための小さな御堂のご依頼を頂いた寺院の御住職も感じられていたことで、独居老人や核家族化が増加していることも相まって、古くから続く寺院を中心とした地域のコミュニティまでもが、年々希薄になりつつある、ということだった。

計画においては、通夜を執り行う場をつくると同時に、地域コミュニティの新たな芽吹きとなるものを思考し、根源的な意味での「生と死の祈りの場」をつくることに行き着いた。

通夜の場で故人（死）と向き合うということは、故人（死）と自己（生）との記憶に向き合うということだ。するとそれは自然と自己(生)を見つめるという行為にもつながっていく。

つまり、死を通じて生へ、そして生から死へと、我々の存在（命）への思考のループが生まれていくことである。

この思考のループをつなげることで、他者や、事物、風景、記憶、そして自身を、本当の意味で慈しむことができるのではないだろうか。

その感情は、誰かと挨拶を交わすことや、誰かに手を差し伸べることなどの日常のコミュニケーションの発端へとつながっているように思う。そしてそういった日常の何気ないやりとりの先に、新たなコミュニティが生成されていくのだと考えた。

このように、根源的な意味での「生と死の祈りの場」を思い巡らせながら、建築家、家具作家、金物作家、造園家、その他多くの職人達、そしてクライアントである宗教家と協働することで、生と死に向き合うことのできる静謐な空間を目指した。

仏教上、八角形という形は宇宙全体や世界の中心を意味するといわれている。その八角形の骨格を四角形のボリュームの中に内包させ、故人と自己が向かい合うための謂わば世界の中心をつくろうと試みた。

八角形を成す放射状の壁（耐力壁）が空間の中心を規定しながら御堂全体を支え、また余白の壁（雑壁）に囲われた残余空間には機能的に必要な諸室を配した。

素材は、仏教的な意味を纏った栗材、光を豊かに導く砂漆喰の天井と壁、視覚的な重量感を持った磚を張った床など、感覚に作用する力を持った、自然に近い素材を効果的に採用することで、中庸で静かな背景となるよう努めた。

空間の中央に置かれた安置台に故人が横たわり、それを囲むように近しい人々が椅子に腰掛け、故人との最後に思いを馳せる…。

その状態のあるべき感覚や空間の姿を意識しながら、放射状の壁とそれらをつなぐ梁型、レイヤー状に光を制御する開口部、水平垂直方向の寸法体系の統合や、空間の重心を整えることで、「他者の死と自己の生」へと向き合うための、静謐な秩序を空間に纏わせることを目指した。

毘沙門堂と、境内を形づくる本堂。

それら「生と死の祈りの場」を中心としながら、それぞれの余白である軒下の陰翳の豊かさや、境内をひとつにつなぐように計画した庭などが、周辺環境やそこで暮らす人々を柔らかく受け入れはじめている。

生と死を孕んだ空間の狭間を、生き生きと駆け抜ける子供達。

庭の草木を眺めながら散歩をするお年寄り。出会えば自然と挨拶を交わす。そこに小さなコミュニティの芽吹きを感じる。

それぞれの抱える「生と死」にそっと手を合わせ静かに向かい合うことと同時に、それを取り巻く環境や日常の営みが、より豊かなものとなって繋がっていくこと。

そしてその先に、この世界を平静な視点で見定めることのできる確かな指標が生まれてくることを願っている。

写真1　© Norihito Yamauchi

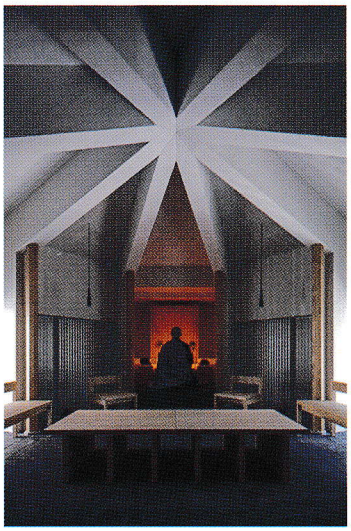


写真2　© Norihito Yamauchi

● AACA賞　奨励賞

島のローカリティーを映し出す

＋フューチャースケープ建築設計事務所　代表取締役
石井 大五

瀬戸内海の離島、伊吹島につくった公衆トイレ。島の活性化、および、来訪者の観光スポットとなることを期待された。ローカリティーの強く残る離島で、ローカリティーとつながりながら、同時に、そこから違和感のない程度に自立した建築をつくり、島とローカリティーの可能性を示唆しようとした。

周縁／中心

島では、トイレは、母屋とは別の離れ、周縁空間に置かれる。それは、四国本島と離島の関係に似て見えた。母屋からはじかれた周縁的空間のトイレを、島のエッセンスの凝縮のようにつくることで、周縁である島に強度を持たせ、島とそこに暮らす島民一人一人が中心であることを意識させたいと考えた。

江戸時代、島には、上方から大分に向かう定期船が寄港し、流行り物も四国本土より先に届くほどだった。その名残で、平安時代の京言葉が、今でも日本で唯一使われている。そういう、かつての瀬戸内の自立した小さな中心だった記憶とも結び付いて行く。

島の時間と空間

島の民家のボリュームに似た家型を設定し、トイレを集めた。

そこに、島の時間と空間を重ね合わせた。時間と空間の上で唯一無二の場所をつくろうとした。

11本の光のスリットが建物を通り抜ける。そのうちの5本は、島の伝統行事の開催日と夏至冬至の日の午前9時の太陽方位を示している。午前9時に一筋の光が抜ける頃、島民は季節の訪れを知る。そうやって、時間の上で、島の座標を定義した。

一方、残りの6本は、伊吹島から6大陸の主要都市への方向を示している。島民が、世界とのつながりや、一人一人が世界の中心であることを意識し、周縁と中心の関係を相対化する。そうやって、空間の上で、島の座標を定義した。

ローカリティーの重ね合わせ

次に、その建築の上に、民家の屋根勾配、色彩、迷 路のような島の路地、島の生活を支えた雨水を溜める井戸など、島の景観やローカリティーを映し込み、実体化して行った。

それらは、現実のローカリティーと、微妙な差異で、少しずらしながら、取り込んでいる。そのかすかなずれが、実際の風景を見る際の引っ掛かりを生む。観光客に島の風景に気付せ、島民に島らしさを思い出させることを意図した。

初めて島を訪れた際、案内役だった支所長に、「島の皆様に喜んでいただける建物をつくります。」と、お礼のメールを送ると、「そんなものをつくってもらっても困る。外から人を呼ぶ斬新なものをつくってください。」と返信が来た。離島は保守的という思い込みは消え、提案の方向性を大きく方向転換した。最初の役所でのプレゼンを、支所長は非常に喜び、その後の島民プレゼンでも、高齢者ばかりの参加者からは、ネガティブな意見は上がらず、好意的な反応ばかりだった。新しいものを受け入れる、昔から続く先進的な気風もまた、島のローカリティーであり、それがこの作品の成立の母胎となった。

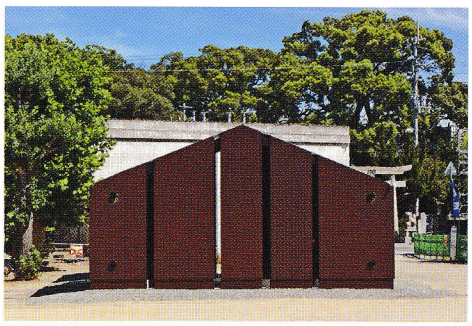
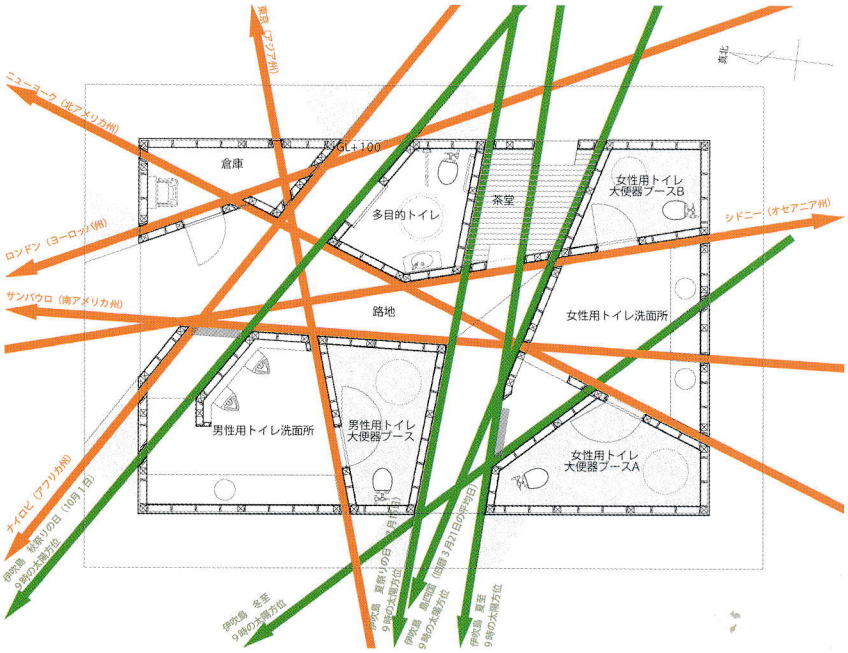


写真1

写真2



時代の華一輪

何故こんなにも心惹かれるのか

グラフィックデザイナー
イラストレーター
新制作協会協友
日本美術家連盟会員
日本建築美術工芸協会会員
置鮎早智枝

私は有機的な線と放物線に似た線を用いて絵を描いています。幼い頃より何故か植物の“線”に深く魅了されています。立ち枯れた雑草の動き、落葉した枝に残り少ない葉が在る形、絡み合う蔦の遊び、そんな自然が織りなす形や線に“美くしさや面白さ”を感じ、その憧れを文字にして表現しています。

文字は和歌や俳句、物語や詩などの一編、オペラやロックなどの歌詞を墨文字で書きます。書家でない私は、漢字、ひらがな、カタカナどれも自由に描け、その上、漢字の意味も絵の対象になり、それに大好きなが音楽が加わって、イメージも膨らみます。

”和歌をエアロスミスのスティーブン・タイラーが歌ったら…”
”モーツアルトが平安期の宮廷をオペラにしたら”
(モーツアルトはアバンギャルドでシニカル！)
”芭蕉や立原道造をジョンレノンが歌ったら…”

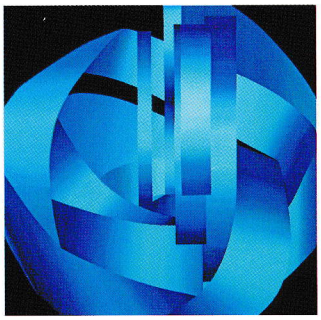
色々想像をめぐらせ書いていると、文字がそんな造形をもたらし、楽しい表現にもなり、それらをキャンバスに何枚も貼り重ねて仕上げています。

以前は彩色で、街や現代建築を描いていました。現代建築には規則的かつ物理的な音や空間を感じ、あえてシャープな曲線で表していました。20 年程前、夜明け前のパリ・シャルルドゴール空港に初めて降り立ち、空港内に入って行くと薄暗い空間にアーチ型の幾何学が目に飛び込んできました、ともすると自転車のリムの様にも感じ、交差した直線と曲線が暗の空間に浮かんで、まるで合わせ鏡に映ったエンドレス…と興奮気味でした。数年後その衝撃を描き、新制作展に初出品し入選しました。その後「パリ・オペラ座（　バスチュー)」「ポンピドー美術館」音楽ホールの「シテ・ドゥ・ラ・ミュジークと現代音楽」「お台場」など、6年程は図形や放物線のような大きい曲線面にグラデーションで描きました。

曲線の出会いは…近年やっと気づきました。私の父は昔呉服屋を経営し又着物のデザイナーでした。父の仕事部屋は幼い私にとっての宝石箱で、いつも入り浸っていました。部屋には帯や着物の図案や型の見本、手描き友禅の絵が何十枚も、それに蛇腹型した色見本が有りました。子供の頃の記憶では、色見本は3㎝ x 6㎝くらいの生地が 10 数枚、白い台紙に貼り付けてあり、1冊が同系色でグラデーションの様に微妙な色の違いで並んでいました。それが各色全て同様で、それに1色だけでも（例えば黄色だけ）何冊も有り、どれもこれも皆色が違うんです。そんな沢山の見本を1度に広げて眺めていました。

しかし今だ甦るのは、色とりどりのシルク糸です。何故か半端な長さのシルク糸が大きな木箱に山盛入っていて、沢山の糸はふわふわと絡んで曲線となり、面白い造形と空間を作っていました。それに加え、シルクの玉虫色はそれぞれ独自の色を放ち、光沢が交わり、見る方向によって色が変化して本当に美しい。そんな木箱の底を覗くと、暗い箱の隙間から入る幾つもの光でまた不思議、ボーとした直線の光りに、絡んだ糸の線や色が輝き動いて見えるのです、薄暗い光の中に色々な形を見つけては、何かしら想像する至福の時でした。

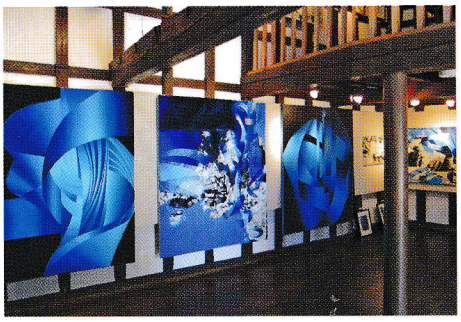
今、年齢を重ね着物を知り、日本人の洒落感、色の豊かさ、研ぎすまされた美意識に感嘆するばかりです。好奇心でいっぱいの幼児期に培った感性は世界は大きく、本質的なものは永遠ですね。そして、今も私の家中の天井や壁面には、枯れ枝や蔦でいっぱいです、いつも存在している“線”その魅力と動き、何故こんなにも惹かれるのか… これからも描き続けるのだと思います。


オペラ座（バスチーユ）

交差

Entertainment

落語「はてなの茶碗」


2011 個展

時代の華一輪

まだまだ…未々…そしてこれから

日本美術家連盟会員／二科会会友
千葉県美術会理事／尾瀬美術館
日本建築美術工芸協会会員
吉野ヨシ子

小学生の時、写生大会があり秋の山を紅葉一杯に表現して、校舎の廊下に長い間飾って頂きました。その時を機会に図工が大好きな私になりました。

金属関係のお仕事をしていらっしゃる山仲間の浦山不二秀様と知り合いになり、金属で作品を作ることを教わりました。

つたない作品でしたが、いつも誉めてくださり紙粘土で300位は小さな作品を作りました。そこから大きな作品に仕上げて行きました。

今は、デッサン、原寸大、そして金属での作品にしています。技術面は、お世話になっている浦山氏に頼っている部分が多々あります。

作品は、宇宙シリーズ、詩シリーズ、露シリーズ、星の王子さまシリーズ、夢シリーズに主に分けて制作してきたように思います。

特に詩シリーズは二科展に多く出品しました。

作品はステンレスという無機質から有機質になってほしいと思い直線と曲線を組み合わせた作品が多いです。球体をよく用いるのは宇宙観を表したいからです。「あってもなくても良いのは彫刻作品ですが、あれば癒やされる。」と教えてくださった、彫刻家の日高頼子先生の助言から癒される作品を制作していきたいと思っております。

福島県出身でしたので3.11後は夢をたくすと言う意味から、種をイメージしての作品が多くなりました。子供たちが夢を描いて進んでいってほしい、沢山芽吹き大きくなってほしいとの願いでの作品になりました。

今福島での親子アート教室は、子供たちに夢をたくすという願いで取り組んでいます。とても小さなボランティアですが…。

私の生まれた家は、農家で茅葺き屋根の家でした。周りの家々も農家の集落で全て茅葺き屋根でした。葺き替えには10人組総出でお手伝いしている光景をおぼろげながら覚えております。

今福島県檜枝岐村の茅葺き屋根を修復しようと保存会を浦山氏と立ち上げました。協力者には檜枝岐村・東京新聞・福島民報新聞・福島民友新聞社・美術関係・新聞を読んでくださった方々・草野茅葺屋根職人の方々などです。小さな12坪程の出作り小屋です。文化的にも貴重な茅葺き屋根で、日本の原風景を存続する意味でも貴重な財産です。大学の先生方がおっしゃいますには今日本にどれだけ茅葺きの家が残っているか？ 後10年経てば消えるだろうと？ どこまで残るか判りませんが、何とか残したいと考えております。

茅場や職人さんも非常に少ないのが現実です。

しかし、是非とも残したいと思いましたのは、先代の平野様の思い、浦山氏の文化遺産重要性の熱い想い、私の幼少の家の思いが重なっていると思います。ですから、このaacaの投稿依頼に感謝します。

最後に彫刻では五感を大切に制作していきたいと思います。又皆様の支援も含めて茅葺き屋根に真っ赤な鬼百合の花が咲き乱れ、平家子孫の気持ちを伝える事を夢見ています。

作品集 2016

福島県田村市役所「夢をたくして」

茅葺屋根の赤い鬼百合

美術館と出作り小屋（出作り小屋記念館予定）

2016年二科展出品作品「波の詩」

ー 土に魅せられて ー

美術造形作家
CAF.N 協会会員
日本建築美術工芸協会会員
小野寺恵美

大学で陶磁を専攻してから、土に関わって作品を制作してきました。

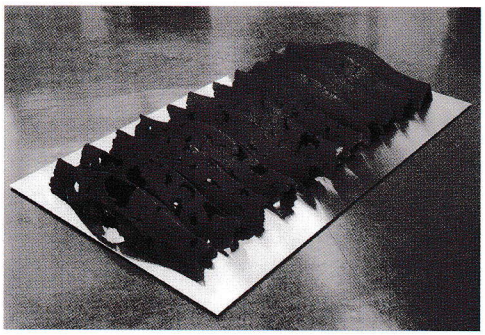
カリキュラムの課題制作に飽き足らず、在学中の長期の休みになると陶芸作家の元で雑務や下働きをして、仕事を見せていただきました。

“土”そのものにこだわって制作している陶芸家の所では、原土を取り寄せ、トタン板に広げて天日に干し、雨に撃たせて土を寝かせ、時には時間をかけて成分を分類していくのですが、学生の私にはその一つ一つの行程が新鮮であり、発見でした。陶土として使える土を見つけに山に行って、探してきたばかりの“生の土”の美しさに驚かされたり、土を練った時の手に吸い付く様な粘り気がある触感は、なかなかないものでした。数種類の土の作品が、穴窯の火の力で、想像していた以上の表情が加わって焼き上がってきた瞬間を、目前で体験できた事は忘れられない経験です。

その後、土を素材に個性的で鋭い切り口で発表している作品に衝撃をうけ、その作家に師事し、新たな土に対する捉え方に気づかされました。助手として学ばせていただいた期間は、作品制作するだけでなくその作品が持つコンセプトや、作品を取り巻く空間の意識も考えさせられました。今、振り返っても凝縮された貴重な日々でした。

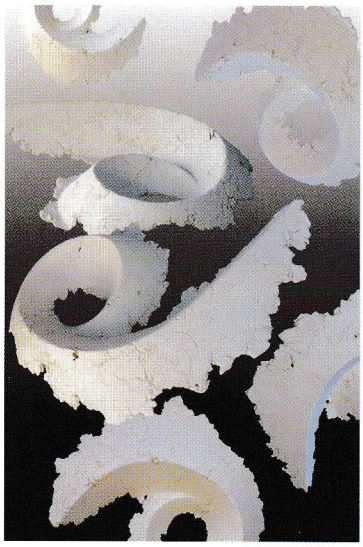
食器から始まって、オブジェ、タイルや、土を素材にした彫刻作品、インスタレーションの作品など、土の多様性を感じて制作してきました。数多くの土の種類の中で、私が知っているのは非常に限られた土ではありますが、その特性である可塑性や、変幻自在な表情に魅せられてきたのだと思います。

“土”から誘発されるエネルギーを感じて、これからも制作していきたいと思います。



1993 CLAY WAVE モダンアート展優秀賞

2003 CLAY WAVE ー誘う土ー



2006 CLAY SPIRAL ー誘う土ー

2015 CLAY SPIRAL 土の波紋

2015 CLAY SPIRAL 浮遊する土

「第３回 街に飛び出す作品展」

芸術性豊な環境と景観の創造

展覧会委員会　選考委員長　**乕屋　正**

一般社団法人　日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家、これらに係わるその他多くの人たちが互いに連携協力し、芸術性豊な環境と景観の創造を目的としてわが国の文化向上に寄与することを願い設立した団体です。

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動としてますます広がりを見せて展開しています。

今年３回を迎える「街に飛び出す作品展」はスターツCAM株式会社とオーナー様のご協力により平成28年10月22日(土)～10月29日（土）建築会館１階　建築博物館・イベント広場において「第３回街に飛び出す作品展」を会員及び一般から募り、10月24日「街なかミュゼ活動」作品選考会を開催しました。

応募申し込み者34名作品35点をaaca推薦者選考委員会：乕屋正選考委員長（鹿島彫刻コンクール幹事長・アートプロデューサー）米林雄一選考委員（東京芸術大学名誉教授・彫刻家）山極裕史選考委員（(株)三菱地所設計・建築家）平山健雄選考委員（展覧会委員会委員長・ガラス造形作家）により物件ごとに推薦作品を複数推薦しました。最終選考はスターツCAM株式会社とオーナー様で行いました。各作品の前には作者が立ってオーナー様に作品を見ながら作品コンセプトをはじめ素材の特徴や作意などの説明をしていきます。そこでは作品の持つ力と共に、作者のプレゼンテーション力が発揮される場となっています。その中からスターツCAM株式会社とオーナー様がaaca推薦者選考委員会のアドバイスを受けながら11作品を選定しました。尚、選考委員はそれぞれの建物を事前に見学し、どこにどのような作品が在ればよいかの検討会を行いました。その建物がある街並み、その建物の空間の質がどのようなものかを理解し、選考にあたりました。

オープニングパーティでは、aaca岡本賢会長の挨拶、オーナー様、スターツCAM（株）直井秀幸社長、aaca選考委員の紹介があり、選出された作品の作者には、推薦状とスターツCAM（株）からの副賞が手渡されました。

オーナー様の選考候補作品は竣工時までに再考選定し、aaca推薦者選考委員会の立会いのもと、設置位置や設置方法の検討をしながら建物竣工に合わせて設置します。

この作品展は単なる作品展のみならず、建物事業主や法人企業などから提供された建築空間に「街なかミュゼ活動」としての美術・工芸作家の展示作品の中から選出された作品を展示することを目的とした展示会です。

展示された作品の中から、建物事業主及び法人企業の方達の参加のもと、それぞれの作品を作家から直接制作意図の説明もあり、協会の選考委員及び審査委員の方達との話し合いの上で作品が選ばれるのです。

作品はそれぞれの建物の空間が持つ雰囲気を理解し、その空間に合うと思われる作品を選出していく訳で、設置された立体作品，あるいは平面作品が在ることにより、その空間がより魅力的な，気持ちの良い、普通とは少し違ったより豊かな空気を醸し出すものになることをイメージし決定されます。

今回は建物物件数は共同住宅５件でうち１棟にはオーナーの住居部分があり、他とは若干おもむきの違うものでした。

以上のようなことで募集を掛けましたが、平面作品は十分に集まりましたが、立体作品の点数が少なく、出展を控えられた方があったと言わざるを得ませんでした。

今後のやり方に更なる方向性及び、作家の方で出品したくなる動機付を考えなければならないと思います。

＜選考候補作品＞

1　南烏山4丁目計画
　野口 真理：空のなか　陶土・粉漆・金属箔（玉虫、金他）立体
　山﨑 和子：on　TIME（2枚）　パネル　染織
　ノグチミエコ：1/ｆ ゆらぎ　ガラス　ランバーコア　レリーフ

2　玉川3丁目計画
　神　まさこ：Ｓｐｉｒａｌ　平面
　神　まさこ：Ｓｐｉｒａｌ　陶器　立体
　鈴木 法明：出逢う　チタン　彫刻

3　池辺町　免震マンション計画
　井上 勝江：いやおいの風　紙　木版画

4　アリア・ソワン一之江計画
　片岡 雅子：こだま　七宝　平面
　白野 順子：オーロラ　絹　染織
　山崎 輝子：Seeds ー風と共に　皮革　壁面　レリーフ

5　西瑞江5丁目計画
　堤　一彦：ＹＵＺＵＲＩＨＡ　大理石　彫刻
　ノグチミエコ：1/ｆ ゆらぎ　ガラス　ランバーコア　レリーフ

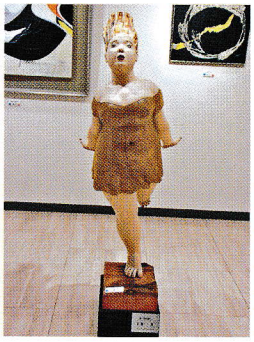
第3回 街に飛び出す作品展　作品リスト

池田 嘉文（会員）　エンドレス　ドリーム
本体：FRP（強化プラスチック・台：ステンレス、鉄（色はアクリル着色）／彫刻　立体（野外可能）
W=160cm × H=155cm × D=80cm　重量約 100kg

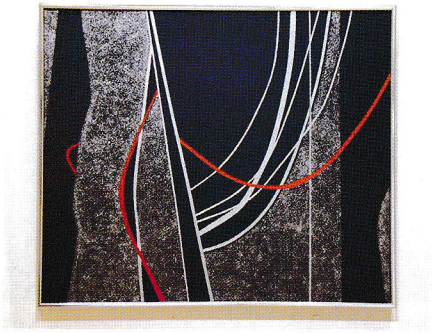
吉野ヨシ子（会員）　流水の詩
金属・石／彫刻
W=110cm × H=210cm × D=110cm　重量約 180kg

片岡 雅子（会員）　こだま
七宝（銅板と七宝絵具）／工芸
W=93cm × H=120cm　重量約 10kg

服部　多加志　獅子吼Ⅱ（ししく）
木・ステンレス／立体
W=65cm × H=75cm × D=16cm　重量約 10kg

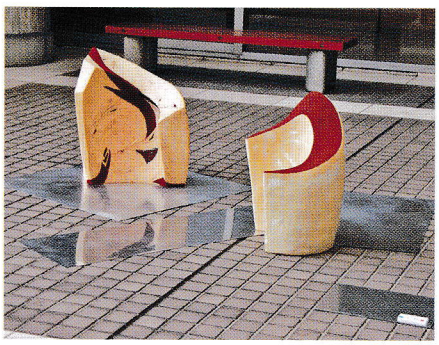


工藤　直　あ！きた春２
木　（寄せ木木彫）／立体
W=60cm × H=145cm × D=60cm　重量約 20kg



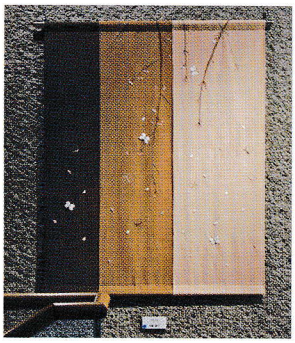
岩佐　敏子（会員）コンポジション
キャンバスにアクリル／絵画
W=74cm × H=62cm

白野　順子（会員）　オーロラ
絹／染織／平面 W=64cm × H=95cm



野口　真理（会員）　空のなか
／陶土・粉漆・金属箔（玉虫、金他）／立体
① W=46cm × H=62cm × D=34cm 重量約 22kg
② W=55cm × H=61cm × D=50cm 重量約 27kg

山﨑　和子（会員）　on　TIME　（２枚）
染織／パネル
W=45.5cm × H=38cm　２枚

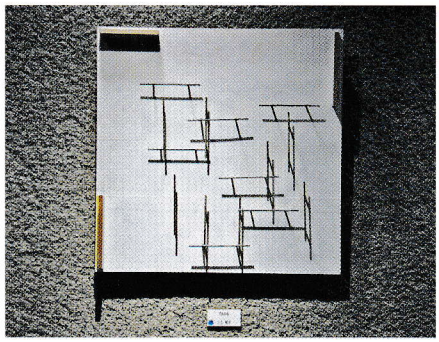


佐藤　静子（会員）　てふてふ
絹紬（和服地用）／タペストリー
W=85cm × H=107cm

沢口　炫三（会員）　天と地と風と
麻布に土
W=92cm × H=98cm

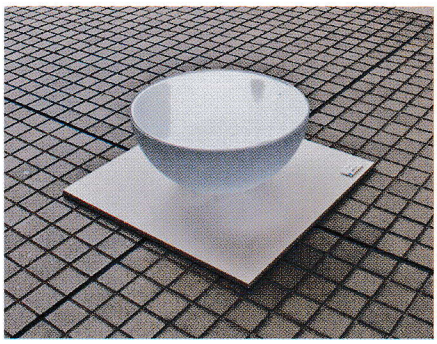
鈴木　法明（会員）　出逢う
チタン／彫刻
② W=120cm × H=70cm × D=65cm　重量 50kg

吉田　佑子（会員）　篁（3点連作）
紙／平面　デジタル版　手彩色
W=37cm × H=44cm（× 1）
W=44cm × H=37cm（× 2）

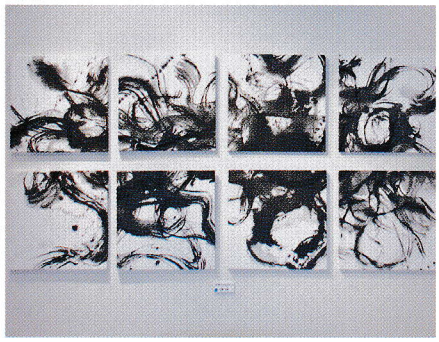


三上　紀子（会員）　うたかた
木・顔料・麻糸・箔／平面
W=66.5cm × H=66.5cm

置鮎早智枝（会員）　モーツアルト「魔笛」から
和紙・墨・アクリル・コラージュ（一部）／平面
W=91cm × H=72.7cm



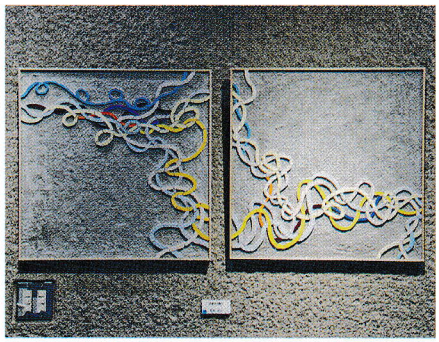
新實　広記（会員）　Vessel
ガラス／立体（彫刻）
W=60cm × H=30cm × D=60cm 重量 130kg



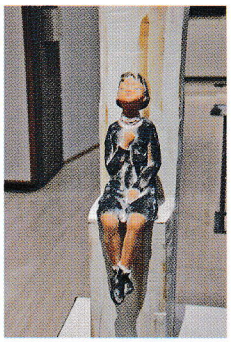
宮野　玄妙（会員）「海の華」はじまりのはじまり より
和紙　墨／墨象
W=30cm × H=30cm ×８セット

堤　一彦　YUZURIHA
大理石／立体（マケット）
W=45cm × H=46cm × D=38cm　重量 30kg

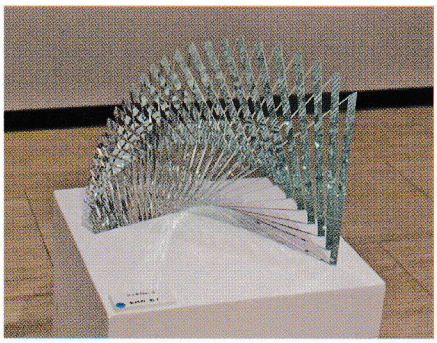
井上　勝江（会員）　いやおいの風
紙／木版画
W=75cm × H=75cm　紙寸法



松本　治子（会員）　浮遊する陶片（2枚組）
タイルとモルタル／タイルモザイク画
W=60cm × H=60cm　重量 3kg　2枚

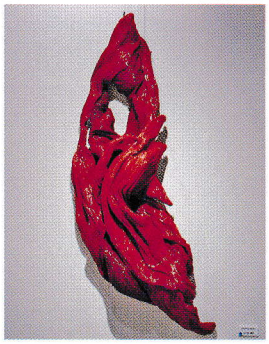


林　佐和子　雲の上へ
テラコッタ・樟・ブロンズ／立体（彫刻）
W=20cm × H=58cm × D=45cm　重量 15kg



安河内　敦子（会員）　シェル NO.3
ガラス／立体
W=50cm × H=30cm × D=30cm　重量 50kg

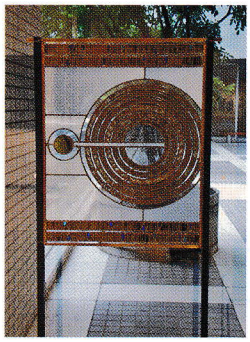
山崎　輝子（会員）　Seeds ー風と共に
皮革／壁面　レリーフ
W=118cm × H=118cm　重量 10kg



五十嵐　通代（会員）　OMOMUKUMAMA
麻・ステンレス線・綿・プラスチックネット／染織
W=90cm × H=120cm　重量 5kg

平山　健雄（会員）「知識の領域に」
ガラス　木彫り額縁入／平面・壁付け
W=60cm × H=60cm　重量 6.1kg
W = 40cm × H=40cm 重量 3.4kg

松田　静心（会員）　The Bigining of The End
桜島火山灰・アクリル・オイル・水干・墨／
木製パネル・キャンバス
W=262.1cm ×　H=116.7cm（３枚１組）

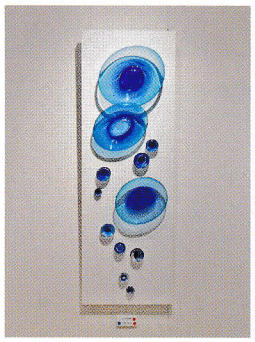


中村　弘子（会員）　Crop Circle
ガラス・鉛／ステンドグラス　平面
W=70cm × H=90cm　重量 10kg

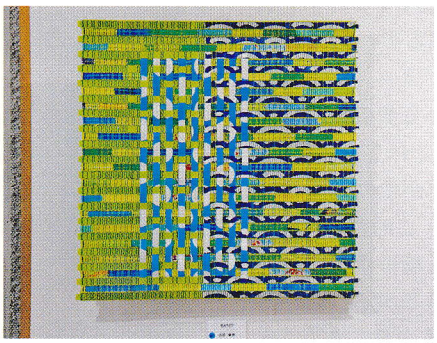
重田　恵美子（会員）　TOMORROW 2016 ― 2
ステンレス／立体
W=40cm × H=60cm × D=20cm
重量 4kg

小原　輝子（会員）　日時計　９選（企画外作品）
アルミ複合板パネル
（設置場所に依り設計施工）
W=70cm × H=90cm

鍵井　保秀（会員）　FLOWER ― 1601
アクリル・キャンバス／絵画
W=91cm × H=66cm

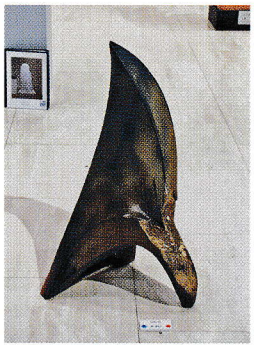


ノグチミエコ（会員）　1/ f ゆらぎ
ガラス ランバーコア／立体
W=41cm × H=121cm　重量 11.3kg

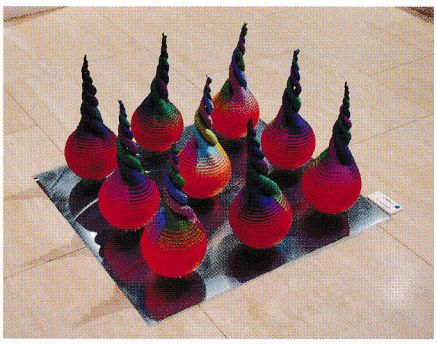


出居　麻美）　色とりどり
絹・レーヨン・塩化ビニール／織（タペストリー）
W=60cm × H=60cm　重量 500g

神　まさこ　Spiral 円
木・錫・金／平面
W=60cm × H=60cm　重量 6kg



神　まさこ（会員）　Spiral
陶器／立体
W=48cm × H=78cm × D=35cm　重量 25kg



小泉　伸子（会員）　NEBURA Ⅲ
綿糸・発泡スチール・紙粘土／ファイバーアート
W=20cm × H=30cm × D=20cm　重量 2kg ×９点

aacaトーク「エコロジーとアート」

自然と愚直に格闘する

東京電機大学理工学部教授
建築・都市環境学系
岩城 和哉

建築デザインの教員として東京電機大学埼玉鳩山キャンパスに着任して3年目の2005年から学生と一緒に屋外アートイベントの空間作品づくりに取り組んでいます。鳩山キャンパスで開催される「国際野外の表現展」に参加したのがきっかけです。それ以来、この展覧会には毎年参加し、機会があれば「越後妻有アートトリエンナーレ」、「中之条ビエンナーレ」、「クムガン・ネイチャー・アート・ビエンナーレ（韓国）」等、国内外のアートイベントに遠征しています。

2010年からは空間作品づくりの経験を大学教育にフィードバックする試みとして、建築設計の授業で学生に原寸の空間をつくるという課題に取り組んでもらっています。また、学生食堂の改修案を学生コンペで公募し、ふたつの学食が新たな空間へとリニューアルされました。このように学生と一緒に実践的な空間づくりに取り組むようになってからすでに干支が一巡しました。この間、竹、木材、枯れ枝、合板、塩ビパイプ、パイロン、FRP線材、PETバンドなど様々な素材で実験的な空間づくりを試みています。

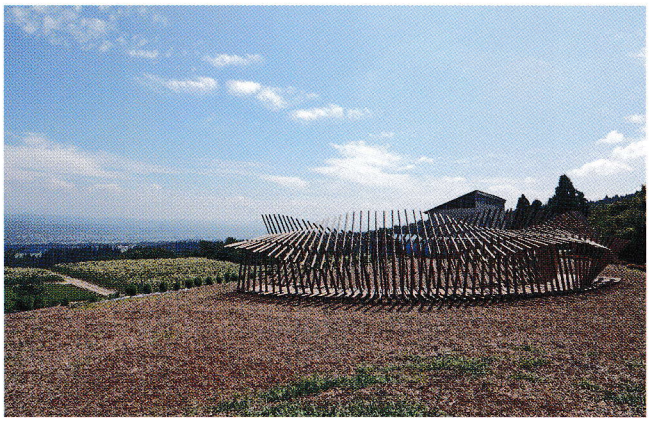
これら空間作品の中から今回は「越後妻有アートトリエンナーレ2015」の作品を紹介します。敷地は新潟県十日町市新町新田の川西ダム上部の高台で、越後三山、信濃川、コシヒカリの水田を見渡せる絶景スポットです。この絶景を主役に見立て、そこに至るまでのアプローチ空間を作品化することを主題としました。コンセプトは「竹のトンネルをぬけるとそこは絶景」です。

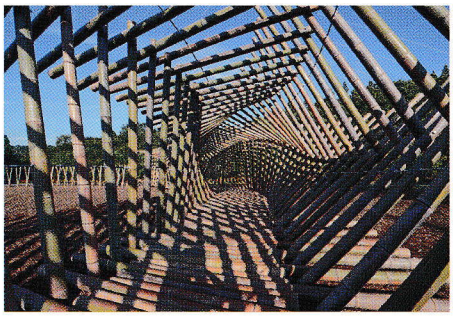
参照したのは神社の参道です。参道は俗から聖の領域に人が移行するためのアプローチ空間です。そこでは鳥居、階段、手水鉢といった空間装置によって人の心と体が聖の領域に踏み込むのにふさわしい状態へと整えられます。この参道のように、人工物に囲まれた環境から雄大な自然環境に移行する過程で、作品を訪れた皆さんが自然への感受性を高め、心と体が自然を受け入れるのに適した状態へと整えられる、そのようなアプローチ空間をつくることができないかと思案しました。

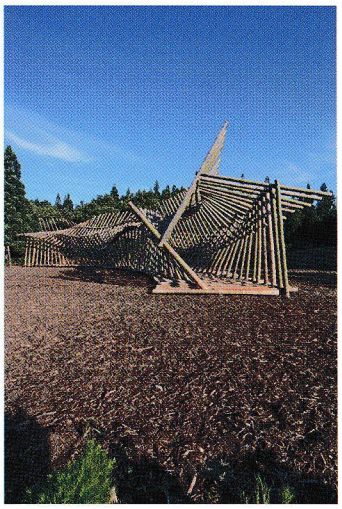
このコンセプトを作品化したものが「妻有絶景 LACHIKU_PENTA（らちく・ぺんた）」です。「らちく」は螺旋と竹を組み合わせた造語であり、「ぺんた」は五角形の断面形状を示しています。五角形に組んだ竹の各辺を螺旋状に回転させながら連結してゆくことで湾曲したトンネル状の空間をつくりました。直線の竹を組んでいるのに出来上がりは有機的な三次元曲面に見え（線織面）、組み立ての原理は単純なのに出来上がった空間は複雑で多様です。単純な原理で多様な様相を生み出すという方法は自然の形態秩序と似ています。

また、竹の隙間から光、風、音、香り、風景といった自然の要素がふんだんに空間内に取り込まれて増幅されます。例えば太陽の光は空間内に明暗のパターンを描き出し、それが時々刻々と変化します。有機的で多様な表情を見せ、自然の要素が増幅されたアプローチ空間をゆっくりと通り抜けることで、作品を訪れた皆さんの自然への感受性が解放され、研ぎ澄まされます。そして、竹のトンネルをぬけると、そこに雄大な絶景が待っている、そんな作品に仕上がりました。

建築では不安定な自然要素は排除され、安定した生活空間の確保が求められます。一方、アートでは自然と好きなだけ戯れることができます。紹介した作品では480本の孟宗竹を使っています。学生と一緒に竹取りからはじめて、部材取り、穴あけ、運搬、組み立てと全身で竹と格闘しました。それが空間作品づくりの醍醐味かもしれません。これからも自然に対する感受性を高め、自然と愚直に格闘することで、自然に寄り添った新たな空間づくりの可能性を探求したいと考えています。







「妻有絶景 LACHIKU_PENTA」（大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015）

エネルギーに対してのアプローチ

造形作家　大野 公士

今回、私がAACA調査研究委員会における「エコロジーとアート」というトークに参加させて頂くことができたのは、2013年に中之条ビエンナーレにおいて3つの作品を制作展示したことがきっかけでした。この作品は「understanding：慧」「House of wisdom:知恵の館」「Tree of knowledge:知恵の実」という3つのパートに別れて、それぞれを中之条町の別々のエリアで展示しました。

「understanding：慧」は、中之条町で使い捨てられた廃車をエネルギー消費の象徴として解体分解したのちに半分に切断して庭岩として使用し、また、現地付近で収集した苔によって、全体を枯山水として見立て配置し現在の宇宙観を問う作品としました。

「House of wisdom：知恵の館」は、同じく中之条町で使い捨てられた廃車を、巨大な蚕に見立てて、中之条町で捨てられた金属ゴミを材料に繭を制作しました。この作品は、元六合村の日陰エリアで展示しました。この場所は、過去に養蚕が盛んな場所でした。しかし、現在は中国の安価な絹糸にシェアを奪われて、生産を止めてしまいました。また、第二次世界大戦中には、鉄鉱石が採掘され陸軍により鉄道も施設されましたが、こちらも現在は使用されておりません。

「Tree of knowledge：知恵の実」は、太陽光発電による電力で照らされるブラックライトの紫外線に、絹糸の蛍光染料が反射して映し出される蓮花座にすわる仏をイメージして制作しました。

これらの3作品は、全て中之条町の営業を中止したガソリンスタンド跡地か、または駐車場において展示を行いました。

なぜ、このような3部作を中之条ビエンナーレにおいて制作しようと考えたのかというと、最初に見学に伺った時、町内の大きな交差点に潰れたガソリンスタンドがまず目についたからです。

中之条町は、多くの地方都市と同じで少子高齢化に悩まされており、ガソリンスタンドの廃業も、原因は無関係ではありませんでした。

また、町内にそびえ立つ大きな送電線の鉄塔は、新潟県にある柏崎刈羽原発から東京に電気を送るものでした。

東日本大震災以降、この送電線には柏崎刈羽からの電気が流されておりません。もちろん、未だ再稼働の目処すらたっていないからです。

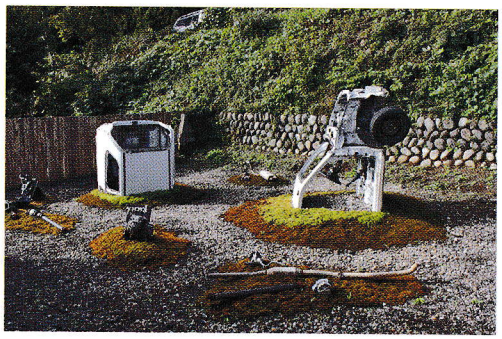
このような中之条町が東日本大震災以降、再生エネルギー問題に取り組み、町内に大型太陽光発電施設を設置した、その同じ時期に、アートの祭典である中之条ビエンナーレにおいて、この3部作を発表できたのは本当に良い機会でした。

2011年以降、私自身の制作の方向性として、震災後の原発問題や、今後のエネルギー使用に対する問題を人間という生物全体で考えなければならない、というコンセプトが明確になってきました。ちょうど、この3部作が、エネルギーに対してのコンセプトが先鋭化されてきた最初の作品といえます。

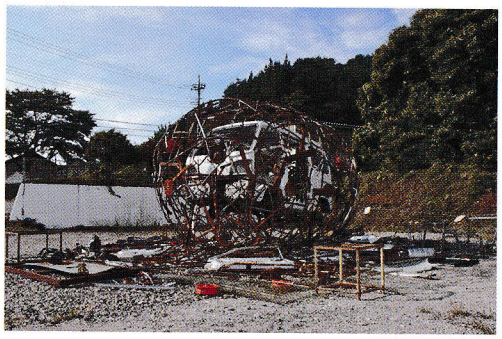
ポーランドから中之条に来日していたディレクターに、この3部作が目に留まったのも、偶然ではなかったように思います。

翌年2014年には、ポーランドで行われたビエンナーレにも、エネルギーと人間の関係性を問う作品を制作して欲しい、との依頼がありました。私がポーランドに滞在して制作していた頃、日本からは日立製の原発をポーランド政府に売りこんでいる最中でした。完成した作品は6パートに別れた大きなテーマ性を表現したものとなりました。

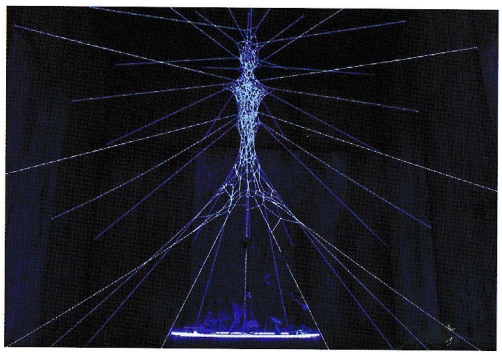
一人のアーティストとして、今後も「ヒト」という生物が、使用するエネルギーの消費によって、どのような結果をもたらすのかを注意深く検証しつつ、その死生観や存在についてのアプローチを、新しい作品として制作してゆくことが目下の課題であります。



understanding: 慧



House of wisdom：知恵の館



Tree of knowledge：知恵の実

第188回 aacaフォーラム

精緻な美の世界ー江戸小紋 小宮康正（江戸小紋染め職人）

フォーラム委員会委員
日本建築美術工芸協会会員 中野恵美子

第188回フォーラムはアトリエユニオン1階東京ショールームにて2011年11月7日（月）に行われた。遠目には無地に見えるが近づいてよく見ると細かい模様の染めの着物がある。いわゆる江戸小紋である。お茶席にも着用でき、一つ紋を入れると色無地紋と同格になる。その江戸小紋について江戸小紋染め職人小宮康正氏にお話いただいた。康正さんは3代目だが、中学を卒業後、重要無形文化財保持者（人間国宝）である2代目の父康孝さんの元で修業した。

本来、小紋とは細かい模様や、小さな柄を染めた着物のことを指し、その中でも江戸小紋は特に精緻で細密な型紙を使った染物を言う。江戸時代に武士の裃に細かい小紋柄が用いられたのが庶民の衣類にも取り入れられ遊び心によって幾何文様、草花、動物、昆虫、風物、道具等様々な模様が生まれた。さらに女性の衣類としても広がってゆき、柄もそのバリエーションも増えていった。しかも江戸時代後期に型紙や型彫りのための刃物の技術革新などに伴いその精緻さが増した。

江戸小紋は和紙を柿渋で加工した型紙を用いて染めるが、型紙づくり、型彫り、染め付の一連の作業を分業で行う。まず型紙だが和紙を2～4枚重ねて柿渋を塗った渋紙を10枚ぐらい重ねて彫る。型彫りには彫りあげる柄により技法や使う道具が異なる。それぞれの代表的な柄は「錐彫り」は鮫小紋、「突き彫り」は菊柄小紋、「縞彫り」は縞小紋、「道具彫り」は七宝つなぎ小紋などであるが、実に種々多様な柄がある。道具作り、型彫り、それぞれの技術が相伴って、良質の型紙を彫ることが出来る。次に染め付けだが、まず着尺の半反分約6～7メートルの樅の木の一枚板の張り板に薄く糊を塗り、そこに生地を張る。生地の上に型紙を置き防染の糊をヘラで置いていく。型紙を送りながらこの作業を繰り返すが12メートル以上ある生地を染めるには50回から80回位繰り返す必要があり、それを寸分の狂いなく行わねばならない。型紙の継ぎ目が分からないように、微細な模様に糊をつけていくのが匠の技と言える。その上に染料を混ぜた色糊をヘラで置く。それを蒸して定着させた後、水で糊を洗い落とすと柄が白く染め残る。つまり模様の部分が染まらない防染である。

これらの工程のうちどれ一つ欠けても制作に破綻を来す。型紙のための和紙の質も大事で、2代目の康孝さんは江戸時代の型紙に近づけるべく和紙の製造にも努力したと聞く。仕事場である板場は南から光が当たるようになっていて奥は少し高くなっており光が届くようになっている。蛍光灯は布の上の糊のムラが見えない。白色光が良いが最近はLEDを使うという。型紙に置く糊は糠ともち米の粉で作るが、最近は糠やもち米の質が以前と異なるので最適なものを求めて研究を重ねている。染料を定着させるために蒸しを行うがその湯を以前はお釜で沸かしていたのをボイラーに変えるなど、「伝統とは改良の連続」という信念を家訓として、染めに欠かせないよりよい環境づくりを追究し続けている。伝統とは積み重ねによってできる最先端と言える。

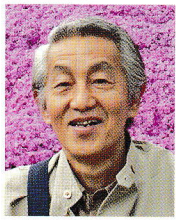
1950年に文化財保護法ができ、形のないものを次の世代につないでゆくために工芸展が重要無形文化財保持者の作品の発表の場として開かれるようになった。康正さんの祖父、康助さんが重要無形文化財保持者となり、父の康孝さんも同保持者である。人間国宝、無形文化財は全ての技があって初めて伝統がつながる。「用途を失ったものは滅びる。ゆっくりと工夫をしながら次世代につなぐ」と康正さんは語る。中でも如何に型紙を守るかが大事である。昔、初代康助さんの元に大量の古い型紙が持ち込まれたことがあった。それらを買い占めることもできたが康助さんは「巷に泳がせておけば誰かが小紋屋を始める、古型を買うお金があったら一型でも多くの型を彫れば世の中に型紙が増える」と言って買わなかったという。

当日、2点の小紋染めの布があった。顔に合わせてみると1点は顔が引き立ち、もう1点は布が主張していた。細かい点の打ち方の違いでそのような違いが生じる江戸小紋の奥深さに伝統文化の凄さを改めて知らされた。毎年秋に日本橋三越で開催される日本伝統工芸展には4代目の康義さんも入選している。今後伝統がどのように展開していくか楽しみである。

調査研究委員会だより

一日研修ツアー（北関東巡り）

日時計作家
新制作協会会員（尾埜行男）
英国日時計協会会員
日本日時計の会会員
日本建築美術工芸協会会員
小野 行雄



11月1日の一日研修ツアーは、館林・足利・桐生を中心とした北関東の歴史・文化芸術に接することを目的とし計画された。古墳が多く、万葉集にも詠まれたこの地を訪れることを楽しみにしていた。

東北自動車道を北に進み、利根川を越えた所が明和町である。最初に、調査研究委員会の山本誠氏制作の明和町町役場前の「明和町　平和の像」(写真1)を見学した。更に隣接したふるさと産業文化館に設置された町制施行記念モニュメント(写真2)を見学。こちらの方は、第10回のＡＡＣＡ賞特別賞を受賞しており、山本誠氏・日高單也氏と小生の共作となっている。

写真１「平和の像」

写真２「明和」

次に訪れたのは、5キロほど北にある群馬県立館林美術館で、第一工房（代表：高橋統一）により設計され、多々良沼周辺の自然豊かで水が遊び芝生が広がる平坦な大地にゆったりと建っていた。

ここには、癒し系(勝手に決めて失礼！）の彫刻家としてシロクマの像などで有名な、フランソワ・ポンポンの工房(写真3)が別棟として再現されている。実はアトリエ再現については、彫刻家で、当委員会の小野寺優元氏が深く係わり、氏の協力の元に造られた。

写真３　F. ポンポンの再現工房の外観

今から300年ほど前、ヨーロッパの王侯貴族たちを魅了した日本の陶磁器の伊万里、鍋島を個人でコレクションし、その専門の美術館として開館した足利市にある栗田美術館を訪ねた。(写真4)

平地から小高い丘に掛けて回遊式に展示棟が造られ、磁器の歴史や製法の展示、また、初期の素朴なものから、輸出品としてヨーロッパに渡り追加加工をされ里帰りした豪華な壺などを見学した。

写真４　栗田美術館

昨年、国宝に指定された足利氏の菩提寺の鑁阿寺は、館跡に1197年に建立された。その後焼失し、1299年に尊氏の父貞氏により再建された。足利市の市街地中心に位置しており敷地は200ｍ角ほどで、四方を小さな堀に囲まれている。堀に掛かる屋根付きの太鼓橋を渡って山門をくぐり境内を散策した。

また、ここの南東に隣接して足利学校がある。創建時期には諸説あるが、室町時代には既にあったようだ。日本における最古の学校であることは確かで、孔子廟(大成殿1668年)、や方丈(再建1990年)、庭園、書院、菜園場などで構成されている。1549年、フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学」と世界に紹介されたそうである。(写真5)

写真５　足利学校

終わりは、お隣桐生市にある大川美術館に閉館1時間前の4時に到着した。朝から次々と様々な場所を巡り過ぎたこともあり少々疲れたが、近代～現代の東西の著名な画家の作品に圧倒された。今回は特別企画展の100回目として“松本俊介と野田英夫”展も拝見できた。個人的には、松本俊介のデッサンからタブローまで、沢山の作品が観られたのは嬉しかった。

会員交流委員会だより

第11回 aaca 愛知・飛騨高山・岐阜地区 建物視察会

会員交流委員会委員
日本建築美術工芸協会法人会員　松隈　章

今回で第11回を数える建物視察会。私は2010年開催の第5回建物視察会からシニアディレクターを務めている。日本各地の建物とモノづくりの現場を訪ねるこの視察会は、①新しい建物だけではなく地域に根差した古建築や近代建築もコースに組み込み新旧の建物を視察すること、②個人で一度にはなかなか訪れることが難しい建物を巡ること、③単に有名な建物を視察するだけではなく出来る限り設計担当者や施設に深くかかわる方に現地で解説をして頂くこと、④アートなど「モノづくり」の現場もコースに入れること、などを基本コンセプトとしてきた。

昨年は11月11日（金）～12日（土）の1泊2日の日程で愛知県と岐阜県を二日間で一気に巡るコースとした。視察計画立案の最初に思いついたのが、以前から「仕事場と歓待の西洋室を観に来ないか?」と誘われていた左官職人の挟土秀平さんのこと。2016年の挟土秀平さんは、NHK大河ドラマ「真田丸」の題字制作でまさに時の人。さらに、飛騨高山と言えば一度は訪れたい重要文化財「吉島家」がある。幸いなことに数年前に東京でお会いして面識のあった当主の吉島休兵衛忠男さんもお元気とのこと。そして「モノづくり」の視点からは、飛騨高山で1974年の創設当初から、木という身近な素材を使い環境との共生を目指したモノづくりの実践を続けて来られた「オークビレッジ」の活動を取り上げることとし、旧知の上野英二社長に早々に連絡を取った。

近年竣工オープンした話題の建物として、2016年6月にオープンしたばかりでフジモリ建築として話題を集めている藤森照信さんの最新作「多治見モザイクタイルミュージアム」、そして昨年オープンした「MIZKAN MUSEUM」と「半田赤レンガ建物」の半田市にある二つの文化施設を選んだ。さらに、同じく昨年オープンして話題を集めている伊東豊雄さんの「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を選び、近くに行くのであればと関西建築界の雄・武田五一が設計した近代建築で1907（明治40）年竣工の「名和昆虫博物館」を加えた。結果、今回も2日間に見どころをぎゅぎゅっと詰め込んだ欲張りなプランとなった。

建物視察会のスタート・ゴールはいずれもJR名古屋駅。11日朝、参加者34名を乗せた大型借切バスは快晴の名古屋駅前から一路半田市へ。「MIZKAN MUSEUM」では参加者の一人で設計を統括されたNTTファシリティーズの横田昌幸プリンシパルアーキテクトと榊原健館長にご案内頂いた。続いて「半田赤レンガ建物」では宮道利典館長にご案内頂いたが、2016年9月に地元出身の写真家村井修さんの写真展が開催され、写真展を終えたあとに急逝され、「半田赤レンガ建物」への再訪は個人的には村井さんの供養となった。再びバスに乗って、あっと驚く外観をした「多治見モザイクタイルミュージアム」へ。設計者の藤森照信さんのご配慮で、各務寛治館長と村山閑学芸員のお二人に新旧の美しいモザイクタイルの展示をご案内頂けた。そして、陽が落ちる頃に飛騨高山の「オークビレッジ」に到着。上野英二社長が出迎えてくれた。現会長の稲本正さんが1974年に創設以来、三つの理念「百年かかって育った木は百年使えるものに」「お椀から建物まで」「子ども一人、ドングリ一粒」を掲げてきた「モノづくり」について建築家である上野社長に建物と家具を中心にご説明頂いた。併設の木工製品のショップでは参加者がモノづくりの実物を手に取り買い求めていた。そして飛騨高山に宿泊した。

視察会二日目は左官の挟土秀平さんのご自宅へ。建物視察会では二日間で数多くの建物を視察するために十分な見学時間をとることができない。そうしたスケジュールの中、挟土さんからは「2時間の案内時間が取れないのならやらない」との返答があり、どうにか2時間を確保し「ご自宅」「仕事場」さらに非公開の「歓待の西洋室」の3箇所を熱意溢れる雄弁な語りでじっくりと案内して頂くことが出来た。「技」「作品」の実物と挟土秀平さんの「熱い語り」に参加者一同感激。しかし一方で「地元には仕事が無いので東京に良く行っている」との言葉からは、「左官」と言う職人と「地方」での「モノづくり」のいずれもが極めて厳しい状況となっていることを感じた。

飛騨高山市内に移動して重要文化財「吉島家」へ。当主の吉島休兵衛忠男さんにご案内頂く。外国人を含む多くの観光客が来館しているものの年間の維持管理費用の捻出にご苦労されているとのこと。昼食は古民家を活用した「京や」にて飛騨牛を食した後、観光客で混雑する街並みを自由見学し一路岐阜へ。

岐阜市に近づく夕方になると渋滞に巻き込まれ、近代建築のひとつとして愉しみにしていた武田五一設計「名和昆虫博物館」の見学を断念。最後に伊東豊雄「みんなの森 ぎふメディアコスモス」を視察。家具デザイナーの藤江和子さんによる室内のランドスケープを想わせる空間デザインにより、居心地の良い暖かな図書館空間が広がっていた。土曜日の夕刻だったこともあり、多くの市民でにぎわいを見せていた。名古屋駅にはほぼ予定通りの時刻に到着し2日間に亘った建物視察会2016は天候にも恵まれ大きなトラブルもなく無事完了した。

「歓待の西洋室」（挟土秀平）の前庭にて

「天空からタイルの女神が ...」

モザイクタイル作家
日本建築美術工芸協会会員　松本 治子

―粘土山から生まれた多治見タイルモザイクミュージアム―

岐阜県の豊かな気候風土に育まれた多治見市はモザイクタイルの生産全国一のシェアを誇り、館内は江戸末期の煉瓦から現在までのタイルを集めたミュージアムです。

私は秋空の下、ミュージアムの前に立つと幼少時代にあった近所の砂屋さんに定期的に届く土山を見たときのわくわくと心弾む記憶が蘇り、多治見の土で覆われた建物の小さな入口に誘われ夢の見学が始まりました。

1階ロビーでは、タイルで侵食された自動車が待ち受けてくれます。一枚一枚タイルで貼り包まれた新たな中古車の不可思議な存在感は、当館のコンセルジュのようです。奥には世代を越えて楽しめるワークショップスペースがあり、豊富に用意されたタイル材料は、創る楽しさと魅力に溢れています。

―タイルの宝石箱―

2、3階のタイル展示を見て、4階展示室への階段を登っていきます。その途中の階段室は神聖な静寂さの中で、開口部からの外光の導きで招き入れてくれます。4階はタイルの宝石箱です。天窓からワイヤーカーテンが蜘蛛の巣状の筒で垂れ下がり、そこに絡まるモザイクタイルや陶片はあたかも輝く朝露のようです。天空からタイルの女神が光と共に降りてくる入口です。

多治見モザイクタイルミュージアム

銭湯絵タイル「松島の景」

と同時にミュージアムから、人間の手の温もりで出来たタイルが未来への輝きを翼にして、再び飛び立つような幻想的な空間です。

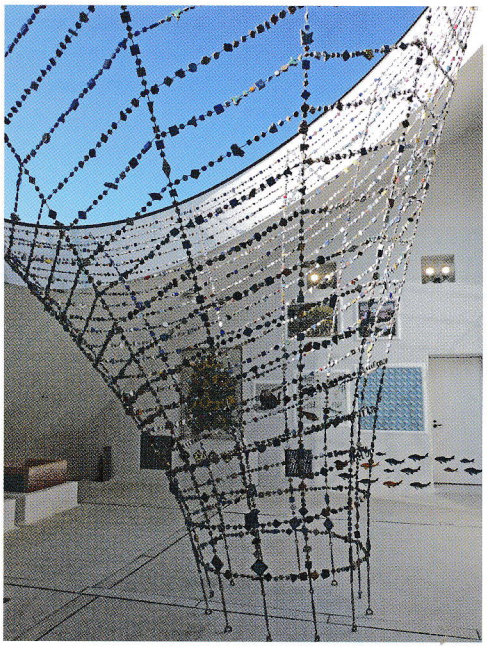
―建材になった陶器―

この4階で特に秀逸な作品は銭湯絵タイルです。銭湯絵タイルは人間が裸になり対峙する点で生活の営みに密着した絵画であるとも言えます。上質な土を捏ねて焼き、精緻な筆遣いで手描きの後、たっぷりと釉薬をかけて再度焼きあげ、色に深味を増して運ばれ、左官職人によって貼り上げられました。長年銭湯と共に昭和の成長期を支え、疲れを癒し和ませてくれました。

特に昭和5年頃の東京荒川区の桜湯絵タイル「松島の景」は淡陶社製(現在ダントー社)で淡路島の珉平焼を継承しているので、海の色の深く繊細な色幅と透明感が釉薬で一体となり焼き上げられています。丁寧に作らたれた作品は臨場感と共に蘇り、展示空間はまるでアルバムを眺めるような時空を越えて過去と現在が響き合います。

―タイルモザイクルネサンス―

タイルモザイクは平面でありつつも立体であるかのように、手の温もりの良いあんばいの曖昧さが独自の存在感になり、歴史上長く受け継がれている理由の一つになっていると思います。眺めていると、少し速すぎる現代の生活リズムを、ゆったりとリセットしてくれるように。このミュージアムは次世代のタイルの在り方を引き出す玉手箱のようなルネサンスミュージアムで、自然の偉大さと人間性回復を再確認させてくれる環境と建築空間のように思います。



4階展示室

株式会社 山下設計
YAMASHITA SEKKEI INC.
代表取締役社長 田中孝典
〒103-8542 東京都中央区日本橋小網町6-1 TEL:03-3249-1551

壁を装う陶の世界 創作陶彩
株式会社丸 勝 dssd.tokyo@marukatu.net
東京都千代田区東神田1-5-6 MK第5ビル3F

UNION
建築文化を創造する
株式会社ユニオン
https://www.artunion.co.jp/en/
〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 tel 06-6532-3731

FOOTWORK
TEAMWORK
NETWORKを活かして
HANWA
阪和興業

okamura
2015-2016
QUALITY PAYS FOR ITSELF.
オカムラ
株式会社 岡村製作所
〒102-0094
東京都千代田区紀尾井町4-1
ニューオータニガーデンコート10階
TEL:03(5215)9640

miraton
THE LATEST ITALIAN BRETONSTONE・SACMI TECHNOLOGY HIGH DENSITY ENGINEERED STONE
株式会社タマ・アンド・ミラトン・ジャパン
〒232-0041 神奈川県 横浜市南区睦町1-5-1
タマアンドミラトンジャパンビル
TEL 045-721-4151 FAX 045-721-4152
事業内容:
人造石・自然石・タイル輸入販売工事・カウンター
フローリング・モザイクタイル輸入販売工事

LED照明付き手すり
やさしさと安心を
たしかな技術で支えます。
ナカ工業株式会社
www.naka-kogyo.co.jp

第17回 瓦屋根設計コンクール ・ 第4回 甍賞学生アイディアコンペティション

■募集期間(募集要項に沿ってご応募ください)

平成29年2月1日～5月10日 (5月10日消印有効)

●募集要項・応募用紙は下記ホームページからもダウンロードできます。
甍賞事務局（愛知県陶器瓦工業組合）　http://www.kawara.gr.jp/
全国陶器瓦工業組合連合会　http://www.zentouren.or.jp/

■審査委員(敬称略)

池田靖史（建築家 日本建築学会理事 IKDS代表 慶應義塾大学教授）
近角真一（建築家 集工舎建築都市デザイン代表 東洋大学大学院客員教授）
堀場　弘（建築家 シーラカンスK&H代表 東京都市大学教授）） 他６名

■募集要項のご請求・応募作品提出先

甍賞事務局
〒444-1323 愛知県高浜市田戸町一丁目1番地1
全国陶器瓦工業組合連合会　高浜事務所内
［TEL］0566-52-1200［FAX］0566-52-1203
［E-mail］info@kawara.gr.jp

設計部門

■課題

国内産粘土瓦を屋根又はその他の部位に使用した建築設計や環境デザインの優れた実施例で、応募時点において完成後1年以上(7年以内まで）経過している建築物及び構造物で、「住宅」「一般」の部門別に審査します。
●住宅部門（一戸建、併用住宅、集合住宅等）
●一般部門（屋根以外に使用した建造物・環境デザイン等を含む）
建物の様式、大小、瓦の産地、形状等は制約いたしません。すでに発表されている作品でも結構ですが、過去の甍賞に応募されました作品の再応募は出来ません。

■賞
- ●金賞（2点）　賞状および・副賞５０万円
- ●銀賞（1点）　賞状および・副賞２０万円
- ●銅賞（1点）　賞状および・副賞１０万円
- ●景観賞（1点）　賞状および・副賞１０万円
- ●佳作（10点程度）　賞状および・副賞３万円

学生部門

■課題「東京オリンピック・パラリンピックの機会に日本の文化『瓦』の魅力を世界に発信する空間提案」

「瓦」が表現する新しい日本の風景が提案されることを期待しています。
空間の大きさや用途などはすべて自由です。

■応募資格

国内外の大学院、大学、高等専門学校又は各種専門学校で建築を学んでいる者（学生）。グループによる応募も可。

■賞
- ●金賞（1点）　賞状および・副賞１０万円
- ●銀賞（1点）　賞状および・副賞５万円
- ●銅賞（1点）　賞状および・副賞３万円
- ●佳作（5点程度）　賞状および・副賞１万円

主催／全国陶器瓦工業組合連合会、一般社団法人 全日本瓦工事業連盟
後援／経済産業省、国土交通省、一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築家協会、公益社団法人日本建築士会連合会、一般社団法人日本建築士事務所協会連合会、一般社団法人日本建築美術工芸協会、全国いぶし瓦組合連合会、株式会社日本屋根経済新聞社

広報委員会だより

■「芦原義信建築アーカイブ展 ー モダニズムにかけた夢」展開催のご紹介

日本建築美術工芸協会は来年の2018年に設立30周年を迎えます。当協会の設立に尽力された建築家芦原義信先生の生誕100年の記念すべき年ともなります。芦原義信先生が長年教授を務められた武蔵野美術大学では今年「芦原義信アーカイブ展」が開催されますのでご紹介します。

会　期：2017年5月22日（月）～8月13日（日）
会　場：武蔵野美術大学美術館　展示室1・3・4・5
東京都小平市小川町1－736
（JR国分寺駅北口より、大学行きバス）
主　催：武蔵野美術大学 美術館・図書館
共　催：武蔵野美術大学 造形研究センター
協　力：芦原建築設計研究所

※ 展覧会開催中に講演会なども計画されています。展覧会の詳細については武蔵野美術大学 美術館・図書館のホームページをご参照ください。
http://mauml.musabi.ac.jp

見学会：aaca主催による見学会を予定しています。
詳細は別途お知らせします。

■ 平成29年度通常総会のご案内

開催日：2017年6月8日（木）
5時45分開会（受付：5時30分～）
会　場：建築会館大ホール
東京都港区芝5-26-20

震災等による「芸術文化復興預金」への募金のお願い

2017年2月末現在　123,184円

協会では、東日本大震災以降、津波・震災・火災等により逸失した文化財及び地域文化の復興のため募金活動をしています。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。
復興預金口座は下記に記載いたしました。

ゆうちょ銀行　〇一九店　当座預金
口座名：AACA芸術環境復興預金口
口座番号：0338383

編集後記

協会では、会報編集委員会とホームページ委員会を合同し、広報委員会として再スタートいたしました。　会報担当委員会は会員有志のみなさんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力して運営されています。委員会に参加をご希望の会員の方はお申し出ください。会員個展・催し物の広告掲載も可能です。詳しくは、広報委員会・事務局にご相談ください。

事務局だより

■新入会員・会員の異動　2016年11月～2017年2月（敬称略）

2016年9月　個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	五十嵐通代（美術家）、井上武司（建築家）、加藤恵利（彫刻家）、石井大五（建築家）、津野恵美子（建築家）、橋口新一郎（建築家）、平瀬有人（建築家）、山田誠一（建築家）、宮城俊作（ランドスケープデザイナー）、宮野玄妙（書家）、野口真里（グラスアート）		
法人会員	㈱織江	代表取締役 作山雄彦	〒107-0061 港区北青山2-9-16 ＡＡビル1階 TEL.03-5772-5801
	六花亭製菓㈱ 中札内美術村	館長 飯田郷介	〒179-0072 練馬区光が丘3-7-3-507 TEL.03-5997-6281
	ナカ工業㈱ 東京支店	常務取締役 久保木巳三雄	〒110-0014 台東区北上野2-23-5 TEL.03-5817-5300
	㈱ナカサアンド パートナーズ	代表取締役 仲佐　猛	〒153-0051 目黒区上目黒2-18-4 TEL.03-5722-7754

《会員の異動》

個人会員	丸山旦桂 （旧名）	名前変更	丸山祐音雲（まるやまちおう）
法人会員	豊田商店	住所変更	〒141-0031 品川区西五反田1-32-4 サンユー西五反田ビル TEL.03-5719-7570 FAX.03-5717-7571
	岡村製作所	住所変更	〒100-0014 千代田区永田町2-13-5 赤坂エイトワンビル4階 TEL.03-6634-7750 FAX.03-5501-3561
	内山緑地建設	住所変更	〒104-0032 中央区八丁堀4-9-13 ニチレックビル5F
	太陽工業㈱	担当者変更	空間デザインカンパニー 営業本部　中島康友 （前任　水谷裕一）
	高島屋 スペーツ クリエイツ㈱	担当者変更	戦略営業部 齋藤宗弘 （前任　小針哲二）

aaca 2017.4 no.76

発 行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人　会長 岡本 賢
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
URL　http://www.aacajp.com
E-Mail　info@aacajp.com

編 集　広報委員会
委員長　飯田郷介
会報担当副委員長　野口真理
会報編集委員　五十嵐通代　石田眞人　田島一宏　山下治子

編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション